

沖縄力を支える人材

沖縄力を支える人材
「この人の沖縄力」

この人の 沖縄力

おきなわりよく

いつも前向きで

決して後ろを振り返ることなく

自由奔放に人生を切り開く

バイタリティあふれるウチナーンチュたち

2017 内閣府沖縄総合事務局

この人の沖縄力 目次

●対談
沖縄の「人」の力をつなげて大きなパワーに！ 2
日本トランスオーシャン航空代表取締役社長
丸川 潔
×
能登 靖
内閣府 沖縄総合事務局長

粟国島
②1 俺は離島のために生きる人間だ
波平雄翔 さん 44

久米島
⑩18 島の歴史と文化を発信する
学芸員の仕事
宮良みゆき さん 38
②5 島の将来を見据えて農に生きる
山城昌泉 さん 52

石垣島
③3 サバニクルーズは、
魚を捕らない新しい漁業だ
仲田森浩 さん 8
⑨9 八重山に藍の文化を咲かせたい
大瀨 豪 さん 20
⑬13 石垣牛からカンムリワシまで。
島の獣医は大忙し
平田勝男 さん 28
②2 食と音楽でやいまをもり立てる
伊良皆 誠 さん 46
②6 子どもたちに
ふるさとをつくりたい
米盛三千弘 さん 54
②9 でっかい夢を実現した
南の島の酪農家
伊盛米俊 さん 60

宮古島
①1 炸裂する母ちゃんパワー
津嘉山千代 さん 4
④4 離島に最先端の医療を。
熱血ドクター走る
泰川恵吾 さん 10
⑮15 宮古から発信する
ノンジャンルミュージック
下地 暁 さん 32
②4 宮古への愛がほとばしる
情熱ファーマー
川満健一 さん 50

伊良部島
②7 故郷の海を守るため
カニ養殖にかける
吉浜崇浩 さん 56

西表島
⑦7 シマを守り、シマに生きる
池田米蔵 さん 16

与那国島
②2 最西端の
クリーニング屋さんは
純情一途
具志堅学子 さん 6
⑩10 与那国島のプレタポルテ
田頭瑠都 さん 22
⑬16 長命草で島おこし
熱い男が島を元気にする
杉本和信 さん 34

沖縄本島
⑥6 男一匹、花とそばの日々
豊里実令 さん 14
⑧8 歌に踊りに一人芝居もこなす
スーパーバスガイド
崎原真弓 さん 18
⑫12 居酒屋界の若大将
金城良次 さん 26
⑭14 珈琲と風と歌
こだわりつつ自由に生きる
外間也蔵 さん 30
⑰17 元警官にして沖縄最高齢DJは、
国際通りの生き字引
浦崎政克 さん 36
⑲19 楽しい不思議がいっぱい
「興作のおもちゃ箱」
目島興作 さん 40
⑳20 沖縄から羽ばたく
ファッションブランド
嘉数義成 さん 42
㉔28 自然農法で伝統の田芋を育てる
宮城 優 さん 58
㉓30 ニッケイのパワーを
沖縄から発信する
仲宗根ゆうこ さん 62

北大東島
⑤5 小さな島の
ビジネスウーマン
當山清美 さん 12

南大東島
⑩11 そこにある材料で
何でも作る島の名物男
池田正信 さん 24
㉔28 大東太鼓を島の伝統文化に
川満廣司 さん 48

この人の
の
沖縄力

はじめに

本書は、沖縄県の自立的経済の発展に向けて、持続的かつ効果的な地域の活性化につながる意欲的な取組を行っている多様な人材とその活動内容に注目し、JTA機内誌『Coralway』に2000年若水号(75号)から2018年若水号(174号)まで100回にわたって連載された「この人の沖縄力」の中から、30名分を1冊にまとめたものです。常に前を向き、バイタリティーあふれる活動を続ける30人のウチナーンチュの物語です。掲載されている内容は、お名前、年齢を含め、すべて『Coralway』に掲載された当時のものです。

美しい自然と独特の空気感をもつ癒やしの島・沖縄。
その魅力を支えるのが、沖縄の「人」の力です。
よそから来る人をあたたかく迎え入れる
ホスピタリティーと、
明るく前向きなバイタリティーを
兼ね備えたウチナーンチュたち。
そんな人々が織りなす沖縄の魅力について語り合いました。

内閣府 沖縄総合事務局長

能登 靖

多様性を生かした
発展を

能登 沖縄の主な産業は観光業で、これを伸ばすことが沖縄の発展につながるわけですが、私は「観光」という言葉でひとくくりにするのではなく、観光とリゾートを分けて考えてはどうかと思っています。観光は物見遊山というか、名所旧跡を訪ね、買い物や食事を楽しんで時間を過ごすことですが、沖縄には観光地としてだけでなく、



「地域の方と交流することで、沖縄の魅力がよくわかる。」

能登 私たちも沖縄の発展、振興を進めるなかで、地域の人材は重要だと認識しています。地域で活躍されている方の思いや活動内容を把握することも大切だと思いますので、ともに沖縄の「人」の力をつないで、大きなパワーにつなげていきたいと思います。



対談

沖縄の「人」の力をつなげて 大きなパワーに！

撮影・垂見健吾

日本トランスオーシャン航空株式会社
代表取締役社長

丸川 潔

沖縄の可能性は
「人」の力

能登 沖縄県は今、ほとんどすべての経済指標が好調を維持し、かつてない好景気の真ただ中にあると言っても過言ではない状態です。

丸川 同感です。弊社は昨年7月に50周年を迎えましたが、県民の翼としてスタートして以来、沖縄がこれほど明るさを感じる時代になつたのは、はじめてではないでしょうか。離島をはじめ地域の人も皆、明るく前を向いている印象で、これは一過性の盛り上がりではなく、しっかりと根付いている手応えを感じています。

能登 私は2016年春に着任してから、沖縄各地を回っています。そうやって各地を回ってみて、まず海や森など自然環境の素晴らしさを実感します。それと人の魅力ですね。魅力ある人がたくさん活躍しています。

もうひとつは沖縄の空気感。那覇空港に着いた瞬間から、空気が違うと感じます。沖縄には風景が美しいということ以上に、癒やしの力があるのではないかと思うのです。沖縄の空気、自然の美しさ、人のやさしさなどが、都会で傷ついた心と体を癒やす力になっているのではないのでしょうか。

私たちは沖縄の発展、振興を進めるのが仕事ですが、こういった

に面白い体験になりました。

このように、人々の個性、地域の個性、離島の個性が化学反応的につながっていくことが、沖縄の力を高めていくと信じています。

能登 沖縄の「人」の力はすごいです。皆さんおいくつになっても元気に活躍されていますし、若い人も高齢者も、明るくユーモアがあり、バイタリティーにあふれた方が多いです。

そういった人たちの魅力は、沖縄各地に泊まって、宿の方と話したり、地元の居酒屋で泡盛を酌み

沖縄の良さをしっかりと残しながら、発展を進めていきたいと考えています。

丸川 沖縄のもつ癒やしの力は、世界のなかでも相当な競争力があると思います。特に離島は、島ごとにカラーが違い、それぞれの良さをもっています。長い歴史のなかで育まれてきた沖縄の癒やしの力、これをちゃんと伝えられるように連携し、つながっていく。これを生かすのは人の力です。人がどう関わるか、これが沖縄の力を決定していくことになるのでは



「沖縄の価値を上げることに力を注ぎたい。」

ないでしょうか。

例えばJTAはLGBTのイベントに協賛していますが、これはどんな人が来ても安心できるのが沖縄だ、沖縄は最高に居心地のよい場所だと感じてもらえるようにしたいという気持ちからです。

また私どもでは昨年O^{イラッセ}というイベントを開催しました。これは若く才能あふれるウチナーンチュたちに出会いの場を提供し、そこで相互につながり、化学反応的に発展していくことを期待したものです。その結果、ここからさまざまなコラボが生まれるなど、非常

先ほどの癒やしともつながるリゾートとしての顔もあります。リゾートというのは、観光地をあくせく巡るのではなく、ゆっくり滞在して、非日常の時間を過ごすことです。

例えば離島では、のんびり過ごす時間こそふさわしいように、沖縄なら訪れる人が自分に合った居場所を見つけることができます。そういった多様性を、沖縄はもっています。画一的な開発で、その魅力を損わないようにすべきではないかと思っています。

丸川 確かにそのとおりですね。観光の主役はお客さまを迎える沖縄の人です。美しい風景は人を感動させますが、そこに人が介在することで、その思い出がぐんと深くなります。よそから来る人をあたたかく迎える沖縄の心、ホスピタリティーがあるからです。

ですから人を育てることが、沖縄にとって大切だと考えています。私もこれからは空のネットワークだけでなく、沖縄の人のネットワークづくりで地域のお役に立ちたいですね。

能登 私たちも沖縄の発展、振興を進めるなかで、地域の人材は重要だと認識しています。地域で活躍されている方の思いや活動内容を把握することも大切だと思いますので、ともに沖縄の「人」の力をつないで、大きなパワーにつなげていきたいと思います。



「健康自然食」を自認する千代さんの料理。海のものも畑のものもこだわりの宮古産だ。

よく働く手が作り出す素朴な郷土料理と、千代さんの明るい笑顔は津嘉山荘の名物だ。



津嘉山千代さん

●宮古島

炸裂する母ちゃんパワー

「**今**度の土曜日に宿泊したいんですけど、空いてますか？」
民宿に電話を入れると、
「ハイハイ。大丈夫ですよ。じやあ空港に着いたら電話くださいね」
明るい声のおばちゃんはそう言うなり、カチリと電話を切った。ハテ、名前も連絡先も聞かないなんて、この民宿大丈夫か？ 心配になって確認の電話をすると、

「大丈夫よお、来る人は来ますから。アツハツハツハツハツ……」
超下級の笑い声が耳元で弾けた。

人気の農家民宿

宮古島・下地町の「津嘉山荘」は、始めてまだ4年と歴史は浅いが、知る人ぞ知る農家民宿だ。希望すればサトウキビ刈りや野菜作り、味噌や豆腐作りなどが体験できるうえ、
「民宿ほど面白い仕事はないです。御飯食べるより何より、働いてるほうがバッチリ好きなの」

と豪語する津嘉山千代さん（56歳）の炸裂する母ちゃんパワーが人気だ。

民宿のほかに予約制食堂「宮古の味・おいシーサー」を経営し、夫の昭洋さんが丹精するサトウキビや野菜の畑を手伝い、89歳を迎える舅の喜順さんの世話に忙しい。さらに、下地町女性起業グループ代表として特産品開発にも情熱を燃やし、パイヤの甘酢漬けでは数々の賞に輝いた。その誕生のいきさつは、



仙人のリクエストで三線をたしなむようになった。

業。那覇に出て靴磨きをしながらデザインを学ぶ。結婚後は3人の子どもに恵まれ、夫は大工、自身はソロバン塾で生計を立て順調に人生が回転し始めた矢先、癌に倒れ、夫が病気で失業し、生活保護を受け、癌が再発し、子供が荒れ……これでもかと苦難が続く。まさに波瀾万丈の半生に、
「北のおしん、南のお千代」と思わず呼んだら、千代さんいわく、
「おしんほどではない」

民宿の客は、トライアスロンの選手から、アメリカ先住民のホピ族まで、実に多彩だ。
「なんでホピの人がわざわざ？」
「宮古は神様が多いそうです。地球のおへそは宮古なんだそうです。そういうえば、仙人も来ますよ」
そう言って「天竺仙人」と銘が彫られた1本の笛を見せてくれた。なんでも一昨年の春に、山奥で電気も水道もない暮らしをしていた「仙人」が訪ねて来て、満天の星の下で笛を吹いて聞かせ、1年後に来るから、
「三線を1曲習って聞かせてください」

こう言い残して去ったという。千代さんは約束が近付いた4月になって、あわてて三線を猛特訓し、「5月5日に仙人が来て、無事、約束を果たしたんです」
今では「豊年ぬ歌」「なり山あやぐ」などレパートリーも5曲に

夢はバスガイド

翌日の午後、千代さんは平良市の平良中学校に出かけた。週3回、ボランティアで「心の相談員」、つまりカウンセラーをしているという。

「だけど子供たちの間では、手相見のおばさんということになってるの」

休み時間になって、女の子たちがカウンセリングルームにやってきた。1人の少女が真剣な表情でおずおずと左手を差し出すと、
「さて、占ってしんぜよう。なに？ 宮古高校を受験したい？ 一生懸命勉強すれば、絶対合格する。そして高校でスポーツマンの彼氏が

「大きな台風がきて畑が一面パイヤの海になってしまい、もったいないから皮付きのまま漬物にしたら、皮と肉の間にバイン酵素がある優れものということ、災い転じて受賞してしまっただす。ウフフ……」

千代さんが夕食の準備を始めた。「今日のお料理は、シイタケさんと陸ノリさんがお友達です」などとはしゃぎながらも、手はテキパキ働いて、瞬く間にお皿が並んだ。「健康自然食」を自認するだけに、材料も自家製無農薬野菜や「お父さんが釣った」魚、海藻、豆腐……といったってヘルシー。体にいいニンニクやオリーブ油もよく使う。

「まるでイタリア料理みたいです。ね。宮古のマンマの味！」

その途端に笑いが炸裂。それにしてもよく笑う人だと思ったら、幼い頃はナツミ（泣き虫）と渾名されるほどの泣き虫だったという。

波瀾万丈の半生

来間島生まれ。幼い頃に母を亡くしたため、朝、父や兄姉が出てしまいうと、屋敷のガジュマルの下でひたすら泣いた。島の人は、「ナツミ」が泣き始めたから8時だとか、泣き止んだから12時だとか、時間がわかるほど泣いたんですよ」

その後、住み込みのお手伝いをしながら宮古島の定時制高校を卒

できる」

「ワー、やったあ！」

千代さんの自信に満ちた言葉に、少女たちの笑い声が弾け飛んだ。「お母さんの言うことも先生の言うことも聞かないのに、おばさんの手相は当たるって評判なの。フフ」

この日、12人の中学生に夢と希望を与えた千代さんに、自身の将来の夢を尋ねると、即座に、「バスガイド」という答えがかえってきた。

「バスガイドは本当に夢のある仕事だと思っんです。以前、新聞にバスガイドの募集が載ったので電話したら、『あなたの年齢は？』と聞かれて、『55歳』と言ったら、『イヤイヤイヤ……』と切られてしまった。キャハキャハキャハ。だけど宮古の御嶽とか、深い深いところを案内できるのは、うちの年齢じゃないかしら。だから60歳越えたら、バス買ってもやりたい」

シマを愛するこの情熱。千代さんがバスガイドになったら、絶対絶対いいハズ。



最愛の家族と。器用な昭洋さんは屋敷の修繕などもお手のもの。



パイヤは島のあちこちで見かける身近な果実。熟していない緑色の実を野菜として使う。



宮古の産業まつりで、自ら開発した特産品を販売する千代さん。



お客さんからのファンレターは大切な宝物。



自作のシミ抜き道具。

具志堅学子さん

●与那国島

最西端のクリーニング屋さんは純情一途



ムワッとした熱気が充満する作業スペースで、せっせとアイロンをかける学子さん。



島の人口に対して洗濯物が多いのは、3年も4年も預けたままの人も多いからだという。



アルコール度数60度の泡盛は与那国島の特産品の一つ。「サイドビジネス」の瓶のクバ包みに精を出す。



学子さんがこよなく愛する日本最西端之碑がある西崎。「この風景を見るとなぜかほっとするんです」

店

に入ると、天井からつるした山のような洗濯物に圧倒された。ガーガーゴーゴー乾燥機が回る音、ムワッとした熱気。とにかく暑い。「冬はTシャツ1枚でちょうどいいけど、夏は冷房なしだからたいへん。扇風機を使うと熱風が吹くんですよ」
せっせとアイロンをかけながら具志堅学子さん(42歳)が言う。
東京から2000キロ、那覇か

らでも520キロの与那国島は、日本最西端の島だ。台湾にもっとも近い国境の島の、その西端、久部良集落にある「クリーニングショップよなぐに」は、だから日本最西端のクリーニング屋ということになる。

店主の学子さんは、女優の藤田弓子に似た、小柄でポッチャリしたかわいい女性。島で唯一のクリーニング屋は女の細腕で営まれていた。
それにしても、いくら島唯一と

いっても、この洗濯物の多さは尋常ではない。人口約1800名の島人はよほど洗濯好きなのか？
「正直言つて、3年も4年も預かりっぱなしの服とか毛布もあるんですよ。3分の2は預かってますね。急に、飛行機の出る1時間前に電話してきて、はいはい、今から出張に出ますから、背広もらいましょうね」なんて言われて、あわてて届けたり……」
なんと、店は丸ごと島人のクローゼット状態なのだった。

健気で意地っ張りな女の子

映画「老人と海」で知られる久部良の漁師の家に生まれた(ちなみに映画の主人公・糸数繁さんは学子さんのおじいさんだそう)。
6女1男の3番目の女の子は、「弟と相撲はとる、ケンカはするはで、親に叱られて縛られたこともあるほど、男気性だったんです」
自立心も旺盛で、中学を卒業すると自活の道を選択。石垣島の定時制高校に入学し、働きながら学校に通った。裕福な家だったから、仕送りに頼ってノホホンと青春を謳歌することもできたのに、
「私は絶対、親の厄介にならない」
そう決めていたという。なんて意地っ張りで健気な女の子だろう。

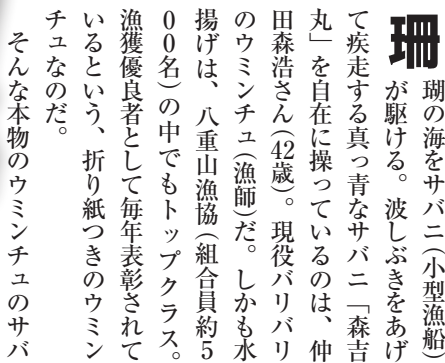
那覇商業高校定時制へ転校後、沖縄国際大学へ。卒業後、沖縄本の検針、水道の集金、それに島特産の泡盛「どなん」のボトルをクバの葉で包む手内職と、できる仕事はなんだったってやっている。
「からだが与那国」というほど島を愛する人は、仕事ばかりでなく、地域ボランティア活動にも熱心だ。
翌日、久部良小学校で、「与那国町学力向上対策推進実践発表会」が開催された。久部良子ども育成会会長の学子さんは、教育シンポジウムのパネラーとして参加するという。恐ろしいなテーマに、内心おののきながら同行した。
学子さんの発表が始まった。緊張した面持ちで、幼稚園児から中学生まで、地域の約100人の子供たちを束ねて清掃やデイサービス活動を行ったという報告をしながら、何度か声を詰まらせた。
「私は子供たちとの関わりが上手ではないのかも……(涙)」
「子ども会に魅力がないのではないかなと思うと……(涙)」
思いがあふれるたびに涙する。なんとまあ、生真面目で一本気な人だろう。

「自分で言うのもなんですけど、私、一途で涙もろいんです」
だが、学子さんの涙にほだされているうちに、なんだか心がホカホカ温かくなってきた。純粹、純情、純真……忘れていた純な心。どうやら学子さんの涙は、スレきった都会のおばさん(私)の心もまっさらに洗濯してくれたようだ。

えか、あらぬ噂や中傷に悩まされたこともあるという。
そんな話をするうちに学子さんの瞳に大粒の涙があふれてきた。ウーム、なんだかシリアスな話になってきたなあ。私はフムフムうなずきながらも、内心とまどっていた。一方、学子さんは涙、涙のウルウルの瞳を懸命に押さえつつ、「でも、グチ言いながらも与那国が好きなんです。なんでかって？ うーん、わからない。どこがいいのかわかりませんが、やっぱり自分の生まれた島が大好き。というか、好きとか嫌いというより、もう、からだが与那国なんですよ」
島に戻って13年。クリーニング屋の仕事は順調に続いていた。
「最初のころは、飼ってた犬が外に干していた背広や着物をひきちぎってしまい、高い弁償代払ったこともありましたがね」
けれども、この仕事だけで食べていけるほど島暮らしは甘くない。「サイドビジネス」として、電気



アッという間に刺身や魚汁を作ってくれた。さすが漁師の娘。



「実は、7～9月の夏場3カ月限定で、ウミンチュ体験ツアーというのをやっています。サバニで珊瑚礁の漁場へ行き、魚を観察したり、私たちが日常やっている伝統のカゴ網漁などを実際に体験してもらっているんです」

にわかウミンチュ気分が満喫できるこのツアーの企画発案者が、仲田さんなのだ。

く澄んだ八重山のお海だが、「父の代には売りきれないほど捕れた魚が、昔ほど捕れなくなってきた。だけど、この地域でこれからも漁師として生活し、次の世代に引き継ぐためには、資源温存つまり魚を捕らない方法を考えなければならぬですよ」

漁協としてもさまざまな取り組みをしてきたが、いまひとつ際立った成果がみられずにきた。そこで「海を休ませつつ、ウミンチュの技術を生かして食べていく方法。しかも釣り船やカヌーなどの設備投資をしないでできる方法として考えたのが、このツアーでした。実際にやってみたら、1日中海に潜って漁をするより体力的にもキツくない。これは年とつてもできるウミンチュの仕事だと思いました」

寝てるとき以外は
海にいる

2000年夏、ウミンチュ仲間3人で「サバニクルーズ石垣島」を立ち上げた。スタート以来、クチコミで徐々に評判が広がり、昨夏は400人以上が参加するほどの人気ツアーに成長しつつある。

それにしても、なぜ、優秀なウミンチュが観光業に進出を？

「観光というより、魚を捕らない
漁業をしようと思ったんです」

魚を捕らない漁業？
宝石にもたとえられるほど美し

祖父の代に、伊平屋島から石垣島に渡ったウミンチュの3代目。父のサバニに乗るのが大好きな少年だったという。小学1年生のころから、

「木をくりぬいた小さなサバニと一緒に乗って、父が潜って捕ってきたシャコ貝を舟の上で何百個もさばいたり、遊び感覚で漁を手伝っていました」

高校卒業後、東京の専門学校で

高校卒業後、東京の専門学校で

ら、それはないという。

「石垣島の海の文化を知り、本物の漁業の一端を体験してもらうのがねらいですからね。モリで魚をしとめたり、潜水できる人には綱をはずしてもらったり。大きなウツボが邪魔して綱に魚が入っていませんでした。ウツボとウミンチュの格闘を見てもらう。走行途中に突然シケにあい、たいへんな目にあ

ったときも、かえって貴重な体験だったと喜ばれました。人の命を預かるのだから安全第一。絶対無理して出港しませんが、出港したからにはどんな状況でもこのツアーは成立するんだと思います」

夕方になって、一緒に魚市場に行きませんかと誘われた。

「何しに行くんですか?」
「毎日、魚のアラもらって養殖魚のエサにしてるんです」
「えつ、養殖もしてるんですか?」
「4年前からヤイトハタの養殖を手がけているんです」

なんとまあ、いろんな漁業にチャレンジをしている人だろう。

「ウミンチュが海で魚だけ捕っている時代は終わりました。捕り続けるだけの漁業では、未来がありませんからね。これからは総合ウミンチュ業を目指さない」とネ

目からウロコ。八重山の海の申し子のような赤銅色のたくましい男は、未来を見すえた、まさに海の賢者なのであった。

チユなのだ。
そんな本物のウミンチユのサバ

仲田さんなのだ。

電子工学を学ぶ。両親の「当たり前」の仕事に就いてほしい」という熱い思いを受けての選択だったが「東京には住めない」と、20歳で帰島。以来20数年、父とともにウミンチュとして生きてきた。

「定置網漁とカゴ網漁が専門です
 だけど、ウミンチュは風が吹いた
 ら休み。海が荒れたらサーフィン
 に出ます。だから寝るとき以外
 は、海の中か海の上にいる。本当
 に海バカというか、海しか知らな
 いんですよ」

ウインドサーフィン歴は20年
ボードも自分で作るし、一時はウ
ミンチュと兼業でプロシヨップを
営んだこともあるという。1年前
からはカイトサーフィンも始めた
「仕事の海、遊びの海、静かな海
荒れた海……。すべての海のコン
デイションを楽しむたいんです」

ホウ、やるな。ウミンチュウ武骨で仕事一筋というステロタイプな私のイメージは、ガラガラと崩れていった。かたわらで話を聞いていた妻の和枝さんがククツと笑っているわく、

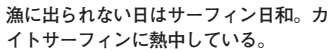
「おとうさんは海の地理はよくわかるけど、陸ではすごい方向音痴なのよ」

16年前に結婚。主婦として、2人の娘の母親として家を守ってきた和枝さんだが、3年前、突然、サバニクルーズの受付マネージャー役を引き受けるハメに。

「サービス業なんていやだと思っ

●石垣島

**サバニ
クルーズは、
魚を捕らない
新しい漁業だ**



てましたから、予約電話が入るたびにドキッ。主人は主人でツアーのホームページを作るといつて徹夜でパソコンに向かうけど、うまくいかずにブチブチ怒るし。すごいストレスでした」

「パソコンは独学でマスターするのに半年はかかった。あれはいままで一番苦しい修業でしたね」

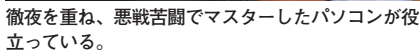
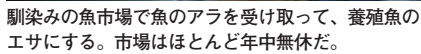
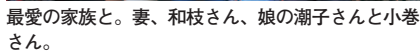
おまけに、1年目2年目のツアーは赤字で預金とり崩し。夫婦ゲンカも絶えなかったそうだが、支えはお客様の喜ぶ姿だった。

総合ウミンチュ業を 目指して

「初めてのお客さんは、釣り好きの20代後半のカップルでした。緊張しながら乗せたら、すごくいいツアーだね」って言ってもらえて、よし、これでいけると気持ちいいが薬になりましたよ」

観光客を喜ばせるために、あらかじめ網の中に魚を入れておいて客に引き上げさせる、といった細工をすることもあるのかと思った

伝統の漁法は一子相伝。父、森吉さんから伝えられた。





妻の早苗さんは診療所の事務を担当。



綿密なチームワークで離島の医療に奮闘する診療所スタッフたち。



ジェットスキーは趣味でもあるが、緊急のレスキューや離島の往診に使うこともある。



岸本カマドさん宅を訪問。パソコンを携帯し、電子カルテを活用する。



Dr.ゴンチームへの感謝の気持ちから岸本さんの家族が作成したカマドさんの診療記録

泰川恵吾さん

●宮古島

離島に最先端の医療を。熱血ドクター走る

ジェットスキーでの往診も

宮古島上野村。ドクターゴンこと、泰川恵吾さん（40歳）は、3年前に、無医村だったこの地に「ドクターゴン診療所」を設立。看護師、理学療法士、作業療法士といったスタッフと連携して、訪問診療を中心にした医療を精力的に行っている。自分の家で診療が受けられる在宅医療は、患者にとっては大助かりのシステムだが、

船の便がないときに島で急患が出たら、ウェットスーツに着替えて、ジェットスキーで爆走する。
「俺の専門はいのち」
臆せずこう言いきる、型破りの熱血ドクターなのだ。

高齢医療の現場

「カマドおばあ、元気にしてた？」
大声で挨拶しながら、家の中にズンズン入っていくDr.ゴン。訪問先の可愛いおばあちゃんらは、岸本カマドさん、94歳。持病の喘息を悪化させ、ほぼ寝たきりだったのが、訪問治療とリハビリで見事復活。現在は、自立歩行のリハビリ中だ。家族の人たちも「やがて走って歩けるはず」と冗談を言うほど回復したものの、面倒なりハビリを少々いやがっている様子。

「あのさあ、おばあは今、血圧もいいし、胸の音もいいし、息も上手にしているから、全部上等。だから100歳になっても、今みたいに元気にして、自分でトイレにも行けるように、お願いしますよ」
リハビリしてくださいよ」

一生懸命に説得するDr.ゴン。だがその様子は、はた目には、おばあにおねだりする孫のようだ。

「あがい（おやまあ）！ はいはい、ありがとう。足が腫れようとしても、腫れないようにするさあ」
おばあもすっかり和んで、なんとリラックスした診察風景だ。

「在宅の場合は、患者さんの性格

鮮 やかなマリンプルーのかりゆしウェア（沖縄のアロハシャツ）に、シマサバ（ゴムぞうり）。リゾートの観光客にしか見えないこの人、じつは島のお医者さんだ。「診療所にいるときは白衣着るけど、訪問診療のときはこれが制服。患者さんのお宅にお邪魔するんだから、明るくてオシャレなほうがいいじゃない。医者らしい威厳がないって？ 患者さんを威圧してもしようがないじゃないですか」

「最初は理解してもらいにくかったから、人口50人ほどの大神島も定期的に訪ねて、『トントン、こんちは』って1軒1軒まわって顔を覚えてもらったんですよ」
なるほど、医者の出前、というか御用聞きスタイルである。そして、最新の医療機器を駆使して、離島でも最先端の医療が受けられるよう工夫を凝らしている。緊急時には、自前の小型高速艇やジェットスキーも活躍する。たとえば、

や霧閉気に合わせた診療をする必要なんですよ」
霧閉気に合わせた診療？

「たとえば、カマドおばあに『おばあさま、おかげんはいかがですか？』なんて言ったらびっくりしちゃうでしょう。患者さんの暮らしぶりも、きちんと把握してないと……。いくら薬を出しても飲まない患者さんの家に行ってみたら、謎の神様が『薬を飲むな』とお告げしてたとかいうことが、冗談じゃなくてあるんですよ」

救急救命の現場から

宮古島で生まれ、3歳まで育った。医師でフィリアの研究者でもあった父上の仕事の関係で、那覇、ロンドン、スコットランド、東京……と転々とする。子供の頃、バイオリンを習っていたというから、お坊ちゃま君だと思ったら、「成績がオール1だったこともあるほどの、悪ガキでした」

10代のころは、バイクに青春を燃焼し、宇宙飛行士に憧れた。

「宇宙飛行士の名簿に、全部ドクターって書いてあって、俺、バカだから、皆医者だと思ったんです」

それで杏林大医学部に合格したのだから、たいしたもの。卒業後、東京女子医大の救命医に。そこでDr.ゴンの医者魂に火がついた。「不慮の出来事で搬送されてくる瀕死の患者さんや、奇跡を祈る家族にとって、救命医は最後の砦。



診療所では4台の往診車を活用。1号は2人乗りのミゼット。

だから最後まであきらめず、不可能と思っても、とにかくやってみるのが、救命医の使命だと思う」
まさしく最前線の医療現場で鍛えられ、阪神淡路大震災やサリン事件などのシビアな現場も体験した。そんな人が、なんでまた宮古島？

「10年やって後輩も育ってきたから、救急は俺がやなくていいかな、と。だけど俺は教授になることに興味はないし。俺が一番やれること、本当にやりたいこと、好きな環境はなんだろう、と」
自問していたときに思い浮かんだのが、子供の頃、夏休みといえ訪れた故郷の美しい海だった。

「俺は宮古が好きだ」
そんなストレートな思いで故郷に戻ったDr.ゴンを待っていたのは、患者の平均年齢82歳という、高齢医療の現場だった。そこでは、

「なにもしない医療というのもあるんですよ。100歳のおばあが老衰で亡くなるうとしてるときに、俺は黙って脈が止まるのを見守っていた。救命医として条件反射のように体にしみこんだ心肺蘇

生術を施さないのは、大変なストレスです。だけど、生物としての寿命をまっとうした人が、自宅で自然に息を引き取ることは、最後の幸せだと思う。救うべきいのち、看取るべきいのち、どちらもないのちの重さは同じだと俺は思うんです」

スペイン瓦の瀟洒な診療所に戻ると、若いスタッフたちも明るいリゾートファッションでキメていた。そこで、「Dr.ゴンってどんな人？」と質問してみると、

「正義感が強くて、今の医療はおかしいと、立ち向かっている人です。先生と僕で、船でも車でも運べる小型のCTスキャンやMRIを開発する、夢のサンダーバード計画を立ててるんですよ」
と瞳を輝かせるのは、早大の大学院生で診療所の研修に来ていた魚森君。なるほど素敵な計画だ。が、ちょっとガキっぽくないか？ 「たしかに先生は子供っぽいですが、嬉しいことがあると、ハシヤイェやうし、『ドクターなんですからもう少し落ち着いてください』っていうんですけど、でもそこが愛すべき点でもあるし」

と、医療事務担当の江戸千景さん。ガキ大将ドクターかあ。だけど、人の「いのち」を慈しむという、まっすぐな心が1本通ったガキ大将だな。ご本人は少々テレながらこう言う。「困っている人を助けるのが医者じゃん」と。



北大東島の港には船が接岸できないため、荷物も人もクレーンで積み下ろす。

商品がある時に買ってストックするのが、島暮らしの鉄則。お客さんの買いつぶりもハンパではない。



とうやまきよみ 當山清美さん

●北大東島

小さな島のビジネスウーマン

「島」でいちばん元気がいい人物？ たぶん私じゃないかしら」 受話器のむこうで、當山清美さん（38歳）の声が弾んだ。以前、北大東島を訪れたときに知り合ったこの人、なんでも「島の歴史始まって以来の女性起業家」として、今ちょっと話題なのだそう。

北大東島は、沖縄本島から東に380キロ。人間が入植してまだ百余年という若い島の人口は、547人。サトウキビ栽培が主産業ののんびりとした島なので、観光



で訪れる人もまだまだ少ない。だからだろうか、島人はどうも恥ずかしがりやが多いようだ。

大胆かつ細心な仕入れで 雑貨店を切り盛り

清美さんは、そんなのんびりムードの島には珍しいパワフルな女性だ。母から譲り受けたマチャグワ（雑貨屋）「宮城行枝商店」の経営だけでは飽き足らず、昨年9月、念願の新規事業に参入。スナック「ブリーズ・こちよい風」をオ

ープンした。

「自分で事業を起こしたいという長年の夢を、ついに実現したのよ。私、絶対自分の名前でもやりたい、納税もしなきゃ、認められたい、と思ってたから、夫の扶養も抜けたし、銀行の借金も自分でしたし」

この日、朝7時過ぎに貨客船「だいたう」が入港した。数日ぶりに生野菜や牛乳、豆腐といった生鮮食品が並ぶとあって、商店にはつぎつぎお客が詰めかけてきた。

「今日はいろんな野菜がそろって



清美さん愛読のビジネス本。

この前驚いたのは、そうめんと麺つゆ買った島外の青年が、『台所貸してください』って」

清美さんは、キメ細かなサービスと大胆かつ細心な仕入れでマチャグワ経営を成功させた島のビジネスウーマンだ。が、唯一敵わないのがオバちゃんたちだという。「賞味期限切れを前日にチェックしておいて、『あい、期限が切れてるさあ』と言うから、『いいよ、おばちゃん、もっていつて』って。このパワーにはかなわないわけよ」

新規事業、スナック経営に乗り出す

北大東島で生まれた。5人兄弟の2番目。沖縄本島の読谷高校から美容学校へ。卒業後、島の役場でアルバイトをしたのが縁で、21歳で役場勤務の夫・清司さんと結婚。2人の子どもに恵まれた。

15年前、村長、製糖工場代表などを歴任した父が、仕事の都合で本島で暮らすことになり「なんの気なしに」母の店を引き継いだ。「最初は、お客さんは来ないし、売り上げは落ち込むし。負けず嫌いだから、なにくそと思ったのよ」

マイナスからのスタートが、清美さんのビジネス魂に火をつけた。「必ず儲かる小さい店のつくり方」『よく売る店はこちらが違う』といったビジネス本を読みまくり、経営を立て直していった。

そして、「40歳前に自分のビジ

ネスを仕掛けたい」という思いが、スナック開店の原動力になった。

「スナックといっても、お色気ムンムンの店じゃなくて、木陰に座ってフツと海風が気持ちいいと感じるようなイメージ。癒やしの空間をつくりたかったのよ」

商店から徒歩20秒ほど。周囲にサトウキビ畑が広がる道路沿いにスナック「ブリーズ」はある。小さく白い新築の一軒家だ。オーナーである清美さんが信頼をおく島出身のママ、糸数春代さん以下3名の従業員が接客にあたる。

夜9時過ぎ。商店を閉めた清美さんは、夫・清司さんの「目指せ、銀座のクラブ。稼いでおいでー」という声援(?)に送られて、イザ出勤。すでに店にはぎわっていた。カウンターには女性の姿もチラホラ見える。

「女性客も多いです。それに、女性の方が客単価は高いんです。大東の女性は太っ腹なんですよ」

お客に挨拶し終えたと、カウンター席に座った清美さん。さすが

気軽に常連客に声をかけ、商品を補充し、従業員を指示し、レジを打ち……清美さんは大忙しだ。

ちなみに貨客船は2週間に3回ほどのペースで入港するが、台風などの天候しだいでも何日も遅れたり、年一度のドック入りの際は3週間もストップするという。厳しい島暮らしの一面がうかがえる。

「だからジャガイモとトウガンはつねにストックしてます。だけど島の人はずいぶんとすよ。お肉なんかも、高くていいものじゃないとダメ。それと、お客の冷蔵庫の中をいつも予測して仕入れないと損しちゃうの。あの人は先週キャベツ買ったから、今週は買わないとか、牛乳をキャンセルしたから、那覇に行つてしばらく留守なんだとか……」

また、飽きっぽい客のために、那覇の間屋やスーパーを定期的にまわったり、「あるある……」などのTV番組やCMをチェックして、新商品や売れ筋をリサーチする。

「豆乳も肉マンも、北大東で最初に仕入れたのがうち。お祭りの出店で、ピカチュウの着ぐるみで集客をはかったのも私。新しいことを企画するのが大好きなのね」

サービスも充実。というか、常連客の、「体温計貸して」とか「ズボン破れたから繕つて」といった要望(?)にも、できうるかぎりは対応してあげるのだとか。

「島には薬局も洋裁店もないから。

オーナーの貫禄(?)と思つたら、「最初のころ、せわしく動きまわってたのよ。そしたらママに、『皆が落ち着けないから、やめてくれ』って言われちゃった」

どうやら、商店で動きまわるクセが抜けなかつたらしい。

「それと、私自身、水商売したことがないから、初めはお客さんと喧嘩したり……女のくせになんて言われると、ついカッとして」

先輩格の従業員からも、

「なんで『ビールおこります』なの? 『おこつて』って言いなさい。もっと男の人に甘えなさい。『待ってたのに』とか言つてごらん。男の人は甘えたら喜ぶのよ」

叱咤激励されても、甘えるどころかついつい突っ張りがちな清美さん。「女の自立」を背中に背負ったビジネスウーマンだもの、弱みはみせたくないに違いない。

……そんなわけで清美さんは、『賢い女は男を立てる』『上手な聞き方が面白いほど身につく本』といった心理関係の本を読みまくり、ただ今猛勉強中だ。

「ようやく自然体で接客できるようになつてきたところ。スナックは、物売る商売じゃなくて、人間と人間の商売だから、いちばん難しい。でも、人つて面白いです」

そう言い終えると、カラオケで「百万本のバラ」を熱唱し始めた。小さな島の社交場に、今宵はどんな物語が生まれるのだろうか?



本業のかたわら、ラジオやテレビで沖縄そばの魅力を熱く語る仕事も多い。ラジオのスタジオで。

豊里実令さん

●沖縄本島

男一匹、花とそばの日々



「こう見えても花は大好き。いちばん好きな花？ 赤いバラだな。赤いバラは人を燃え上がらすから」
ちよっとコワモテの口ひげのおじさんと花。どう考えても「？」の取り合わせだが、沖縄本島内に8店舗を構える生花店「花の藤商」のれっきとした社長だ。全国初という「花の百均（百円均一）」ショップをオープンしたり、結婚式を1万本の赤いバラで飾るプロジェクトを成功させたり……と、抜群のアイデアと実行力で

を決める。最上部に陣取った実令さんは、指で2とか3とか（2箱、3箱）示しながら、豪快に競り落としていく。うまくいくと「ズミ！」のポーズ、失敗すると机にガクッと突っ伏す。じつにわかりやすい人だ。競りの仕組みは、素人の私にはチンプンカンプンだが、競り人と買い手の阿吽の呼吸でコトが運ばれるらしい。

「駆け引きだね。買い手がつかないと、100円のが10円になったりするから、小さな博打みたいなもの。長年の勘で、空気を読みながらタマ（花の意味）を取るけど、基本は自分勝手。カッコよく言えば、思い切りのいい競り」

言葉の端々に、もしや任侠道好き？ と思わせるものがある。案の定、「藤商」の「藤」の字は、「緋牡丹お竜」で二世を風靡した女優・藤純子に憧れて決めたとか。

「つけたあとで知ったけど、藤の花言葉は、ブリーズ・カム・アゲイン。まためんそーれ。商売にはぴったりの名前だったね」

「ゴルゴ13（本人、大好きらしい）のように一瞬、眼光鋭くなったかと思えば、ガキのようにはしゃぎまわる。なんとも振幅の大きい男・豊里実令の半生を聞かせてほしいと頼むと、最低でも30時間はかかるという。「そこをなんとか縮めて！」と懇願して、聞くこと5時間余。身ぶり手ぶりを交えた熱い語りに、思わず時間を忘れた。

知られる花業界の風雲児なのだ。破天荒でパワフルでおチャメ。話し出したら止まらない、動き出したら止まらない。ノンストップ男の口グセは、「男一匹、豊里実令」。

生まれは多良間島

水曜日夕方4時。沖縄県中央卸売市場花弁部のブザーが鳴った。切り花の競りが始まるのだ。ガーベラ、ユリ、リンドウ、バラ……次々に花が運ばれてくる。買い手は階段状の座席につき、競り人が買い手の動きを目で追い、落札者



会社経営のよき相棒、弟・善次さん（右から3人目）と元氣なスタッフ。



切り花の競り風景。実物の花は遠くて見えにくい、産地などで品質を判断するという。まさに賭けだ。



配達なし。花束もなし。人件費や経費を徹底的に削減して実現させた、全国初の「花の百均」店内。



そばフリークの夢は、1万坪の広大な敷地に、沖縄中からそばの名店を集めてつくる「そばアイランド」。

商売はアイデア勝負

高校時代は、那覇の下宿をベースに、連日のようにドンチャン騒ぎ。卒業後、土木作業員、鉄筋屋、クリーニング店、青果物店、鍋売り、布団売り……などの仕事を転々とする。20歳のとき、2歳年下の妻・聡美さんと結婚。一男一女の父になるが、家は放つたらかしのやりたい放題。久しぶりに帰ってみると、妻が昼夜なく働き、必死で生活を支えていた。

「男一匹、豊里実令。なんて情けない男だ。くだらんチンケな男だ」と猛省して人生の軌道修正をしたのが25歳。そして、本人いわく「22番目の職業」となったのが花屋



オリジナルのズミTシャツ。

だった。よろず屋の生花コーナーで2年ほど働いた後に独立した。最初は、ブーケって何ね？ スタンドって何ね？ というレベル。仕入れる花も、バラ、キク、カーネーション、ランの4種類ぐらい。当然売れない。まったく売れない。さあ、そこで実令は考えた。そして爆発的にひらめいた。これはもう毛が立ったね」

そのアイデアとは、若さはじけるニーニーたちに、夜の街で花を売らせる作戦。飲み屋のママや酔っ払いは、「カワイイ！」と花束を買ってくれた。これまでの寄り道人生からひらめいた戦術が、思いがけないビジネスチャンスになったのだ。折しもバブルまっ盛り。

「面白いほど儲かったね。でもバブル崩壊後も、売り上げは落ちなかった。末端のお客さんにかわいがられていたから。ビジネスは、末端に支持されたら潰れない。答えは全部お客さんが持っている」

「百円玉1個で大きな贈り物ができるさあ」が謳い文句の「花の百均」にも、実令流のサブプライズ、驚きの商売哲学が……。

「百円の花は出血サービス。孫が百均で花買ったら、連れてきたお祖父ちゃんは、奥にある普通の花のコーナーで5000円のランの鉢買ってくれるかもしれない」

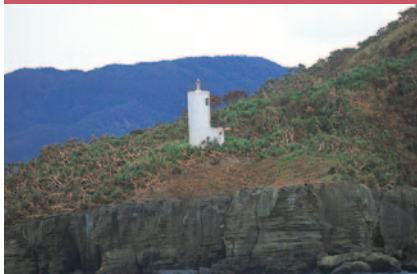
目玉をグリグリさせて語る姿に、思わずクスリ。でも、思いのほか、冷静な商魂の持ち主だわい。

と、突然、「そばが食いたい！」と実令さん。「3歳でそばに目覚めた」という人は、パーラーや居酒屋なども含めて、これまで2000軒のそばを食べ歩いてきたと豪語する。100日間連続でそばを食べ続けた記録もあるそうナ。

「今日の気分は、かつおだし味の効いた、あつさりスーブだな」と選んだのが、コザの居酒屋「根夢」。ここは、昼間、限定で沖縄そばを出している隠れた名店だとか。

ソーキそばが運ばれてきた。井鉢に鼻を近づけたとたんに、「アー、ネギが切りたてだ。ンー、かつおの匂い。ズズズ、アー旨い。チュルチュル、ンー旨い」最後の汁をすすって、お決まりのポーズ、「ズミ！」が出たあ。

「そばに対する熱い思い、情熱を感じる。これが実令の言ういい店。本当のそばは人の心を打つさあ」なるほど。さすが「常識より情熱」がモットーの人。沖縄そばも花も、評価の基準は「情熱」だ。男一匹、豊里実令、「ズミ！」といえる人生に向けて、任侠の花道、いや、花屋の任侠道をばく進中。



サバ崎の先端に建てられた船浮港灯台。



素手で捕獲した巨大なヤシガニ。子どもたちの教材にしたいと妻の敏子さんが勤務する小学校に寄贈した。



池田米蔵さん

●西表島

シマを守り、シマに生きる

地 べたに腹ばい、暗い穴をじっと凝視していたかと思ったら、やおら両手を突っ込み、穴の中の生物と熾烈な格闘を始めた。すさまじい揉み合いの末に引きずり出したのは、見たこともないほど巨大な暗紫色のヤシガニだった。「ヴワッ!」。呆然と見とれていた私とカメラマン氏が思わず奇声を発すると、闘いを制した池田米蔵さん(56歳)は平然としていわく、

「ヤシガニの前にはよくハブがおるから、手を入れる前に確認せんと。下手すると咬まれるからね」「ハブ見たらやめるんですか?」「いやいやいや、ハブ捕まえてから、ヤシガニを捕るわけさあ」そう言っただけでヤリとした。それにしても、夜行性のヤシガニの巣を、真っ昼間に急襲するとは……。東洋のガラパゴスと呼ばれる西表島は、島のほとんどが濃密な森に覆われている。そのため、人間

が居住できる場所はごく限られている。わけでも人口わずか53人の船浮は、白浜集落から船でしか渡ることができない小さな集落だ。米蔵さんはそこで、船浮―白浜間を結ぶ定期船やチャーター船を運行する海運業を営んでいる。

「国から定期船の認可を受けたのが20年前。それまでは、白浜から片道わずか10分ほどの距離なのに、いちいちチャーター船を頼まないとけなかった。住民の足、生活

航路だから、赤字だけど、補助を受けてやってるわけ」たとえようもなく美しい浜やひっそりと静かな家並みが今も残る船浮集落。沖縄の原風景のような場所です。生まれ育ったからこそ、ヤシガニの習性も熟知していたのだ。「ヤシガニに限らず、大ウナギを釣ったり、シジミを採ったり、コルクをこすって音出してコウモリ呼んだりっていうのは、このシマ(＝船浮、集落共同体の意)の小さいころからの遊びなのよ」

仕事は自分で考える

7人兄弟の末っ子として生まれた。両親は田畑で米やパイナップルやシウガを作り、雑貨店を営んだ。父は、わずかでも現金収入を得ようと、山で薪を集めて、当時、波照間島や鳩間島にあったカツオ節工場に売り、ボタンの原料になる貝殻を採り、蚊取り線香の原料になるタブの木の皮をはぎ、本土に出荷した。海に山に、必死で生活の糧を求めてきた父を、米蔵さんは子どものころから手伝ってきた。「小学4、5年のころは、もっぱら荷物担ぐのが専門さあね。中学生になったら、もう船もたされて『白浜まで行ってこい』って、平気でお使いさせられた。船の免許? 復帰前だし、関係ないさあ」中学卒業後、勉強があまり好きではなかった少年は「高校をわざと落ちて」本島の沖縄産業開発青

カメラやビデオで記録を残す。



県農林水産部の依頼で、1カ月に2回、廃村などを回りウリミバエの調査活動をしている。



20年間無事故の定期船「ふなうぎ」。船長が休みの日は池田さんが操縦する。愛犬・小太郎と一緒に。



ミュージシャンの息子・卓さんのポスターをバックに自己流の三線を楽しむ。十八番は「船浮の乙女」。

年隊に入隊。重機の操縦を学び、大阪の大手建設会社で就職した。憧れの都会暮らしだったが、「大阪万博の会場で、パビリオン造ったり道路を造成したり……。5年間いて、結局、嫌気がさしてこっちへ帰ってきた。なぜって? あるとき、暑くて脱いだ防寒着が盗まれたわけよ。それが考えられなかったわけさ、僕には」石垣島の電気工事店で5年ほど働いた後、シマに戻った。「シマには年配の方しかいなかった。若いのが帰ってこない、シマがつぶれるなあ、と」

シシ捕り、NHK集金、郵便や電報の配達……。あらゆる仕事して金ためて借金して船買ったわけ」シマで生きるとは、何でも自分でやる、やれるということだ。「家も建てたし、船の修理もする。料理もやるよ。得意料理は母親から習った呉汁。親からいつも『奥さんもらっても、いつ逃げられるかも、先に死なれるかもわからんから、料理ぐらいできるようにしておけ』と言われてきたから」

シマの安全を守る

シマの自然が心底好きな米蔵さんの趣味は、カメラやビデオ。とりわけ、イリオモテヤマネコの生態撮影には意欲を燃やしてきた。「昭和50年3月、うちのニワトリ小屋を襲ったネコを親父と僕で生け捕りにした。それがイリオモテヤマネコだということで、大騒ぎになってしまったんだよね」米蔵さんは生きたイリオモテヤマネコを初めて捕まえた人なのだ。以来、映像で姿を追ってきたが、「7、8年前に群発地震が発生したとき、消防団の分団長だったにもかかわらず、ヤマネコを探して小屋に泊まり込んでいて帰れなかったわけよ。女房に怒られてカメラも取り上げられてよお(笑)」――庭先で話を聞いている間にも、米蔵さんは通りがかりの人を眼光鋭くチェックしている。それは、犬や猫が怪しいものに耳をピドする現代の「シマ守」なのだ。



沖縄を代表する観光名所、守礼門で。扁額の文字「守禮之邦」について説明。

崎原真弓さん

●沖縄本島

歌に踊りに 一人芝居もこなす スーパー バスガイド



一人芝居は、おばあが孫に沖縄の歴史を語る仕立て。本物のおばあさながらのしわがれた声で熱演する。

「皆 さまとの出会いを大切に、太陽のように明るく、ひまわりのハートで案内させていただきます」

よく通る美しい声がバスの中に響いた。那覇空港で観光団を迎えた「ひまわりバスガイドセンター」の崎原真弓さん(43歳)。身長148センチの小柄なこの人こそ、巷で噂の「カリスマ・スーパー・バスガイド」なのだ。なんでも、バスの中で歌い踊り、さらには空手に一人芝居……と、多芸多才ぶりと決意し、帰沖。今度はフリーのガイドとして再出発した。

30歳で、趣味のバスケットボールサークルで知り合った清彦さんと結婚。一男一女に恵まれる。畜産会社に勤務する清彦さんは、真弓さんのガイドぶりにほれ込み、真弓ファンクラブ会長を自認するほどの、よき理解者だ。いわく、「彼女の仕事は、毎日感動があつて、自分が輝いていられる素晴らしい仕事だと思うんです。だから、辞めようかと悩んだときは、絶対辞めるな、と」

ちなみに、家事も分担。料理はダメだが、得意はアイロンがけという清彦さんは、男女共同参画時代のお手本のような夫なのだ。

ピンチをチャンスに

2000年、沖縄サミットの年に、長年バスガイドを続けてきた姉の西原せつ子さんとともに、「21世紀のバスガイド」を目指してガイドクラブを旗揚げした。同好会から出発し、今ではガイドの幹旋養成などを行うセンターに発展。姉で所長の西原さんいわく、「妹も私も、サービスに終わらないという思いが爆発して、組織を立ち上げたんです。が、翌年、いきなりピンチを喰らいました」

9・11のテロ以降、沖縄観光が大打撃を受けたのだ。キャンセルが相次いでガイドの仕事がなかったとき、真弓さんは行動に出た。

を發揮して、観光客の心をつちりつかんで離さないのだという。今日から3日間、本島各地を巡るといふ岡山県からの熟年バスツアーに同行させてもらった。

昼食に訪れた琉球料理店で、真弓さんはさっそく本領を發揮。運転手さんと一緒に三線を抱えて、「沖縄は芸能の島ですので、唄三線で歓迎したいと思います」と言うなり、沖縄民謡ライブショーが始まった。「娘ジントヨ」「安里屋ユンタ」。いきなりの民謡

酒場状態に、お客さんは目を白黒。東南植物楽園に向かうバスの中では、亀甲墓、清明祭など沖縄独特の文化を紙芝居風に説明したり、面白い苗字や名前についてクイズ形式で話したかと思つたら、突然、おばあの声色が変わって、「平安名ウシさんという珍しい名前前の人がおりまして、嫁ぐ前は、屋宜ウシさんだったんですよ」と笑わせる。このあたりで、す

でにお客さんの間から、「上手や、この人なあ」「最高やわ」という賛辞がチラホラと聞こえてきた。



沖縄の歌、自ら作詞・作曲した歌のCD等も出す多才ぶり。

「じつとしていてもしょうがない。それなら、いつそボランティア活動をしよう」と、ミニディサービスなどで、おじいやおばあに歌や踊りを披露して回ったんです」

そんな苦しい時期に誕生したのが、今や真弓さんの十八番となつた、一人芝居「おばあが語る沖縄歴史ロマン」だ。脚本を書き、演じるたびに、手ごたえを感じた。「沖縄の先人たちは、前向きにピンチをチャンスに変えてきた。私もバスガイドのピンチはチャンスととらえようと思いました」

ツアー2日目。美ら海水族館や今帰仁城跡などの観光を終えた一行は、首里城に向かった。その道中、いよいよ真弓オンステージの開幕だ。まずは愛らしい衣装で、軽快なテンポの紅芋娘の踊り。続いて、地味な着物に手拭いのかぶつたおばあ姿で、アマミキヨの神話の時代や、琉球王国の成り立ちから終焉までをとうとうと語り始めた。途中、空手の話になると、

フリーのバスガイド

「とにかくお客さまに沖縄を好きになっていただきたい。また来たいと思っていたきたい。その一心で、一期一会の精神で、お客さまとのご縁を大切にしています」出身は久米島。サトウキビ農家の9人兄弟の7番目、双子の姉妹として誕生した。子だくさんの家は貧しかったが、夜になると祖父も父母も三線を取り出し、歌い楽しむ芸能好きの一家に育ち、真弓さん姉妹も、幼いころから琉球舞踊を習い覚えた。双子の愛らしい踊りは、行事や結婚式でも引つ張りだこの人気で、

「普段のおしゃべりは苦手なのに、人前で語ったり、踊ったり、スポットライトを浴びることに、魅力を感じていたと思います」

高校卒業後、本島のバス会社に就職し、ガイドの道へ。ところが、やればやるほどマニュアル通りのガイドでは物足りないという思いが募り、しだいに行き詰まっていた。そこで、一度沖縄を離れてみようかと決意し、兄を頼って岐阜に渡り、事務職を経て、岐阜の地で1年ほどバスガイドを経験した。「私が沖縄の人間だとわかると、沖縄について質問されたり、民謡を歌つてと言われる。沖縄を再発見する思いでした。あれ? こういうやり方でもできるんだナ、と」もう一度、ゼロからやり直そう

一転して手拭いを脱ぎ捨て、狭い通路で「ヤーッ」「エイッ」と掛け声も勇ましく、空手の演武を披露。そして、再び手拭いをかぶると、元のおばあ姿で静かに語り始めた。「60年過ぎて、おばあが忘れられないのは、あの沖縄戦のことです。おばあは艦砲の喰えーぬくさ。艦砲射撃の食べ残しですよー。戦争というのは、人間が人間でなくなる、この世で一番恐ろしいものです」

このあたりになると、ハンカチを握りしめ、目をウルウルさせ、すすり泣くお客さんが続出。「すごいねー」「熱演で涙が出る」と、感動がさざ波のように車内に広がっていった。それでも最後は、「おばあは百二十歳まで長生きして、長寿の花を咲かせますよ」と、明るくカチャーシーで締めくくるあたりは、やつぱり根っから前向きなウチナンチュだ。3日目。午前中に南部観光を終えた一行の姿が空港にあった。「もう、最高の旅でした」「真弓ネーネーのおかげで、何倍も楽しい旅になりましたわ」口々に感謝を述べて、涙そうそうで別れを惜しんだ一行。真弓さんの顔も涙でぐっしり濡れている。まさに誠心誠意のガイドぶりだ。今日もきつと、マブイ(魂)の込もった真弓さんのガイドに心を奪われ、沖縄に恋するヤマトンチュがたくさん生まれているハズ。



藍の具合や布の感触を直に確かめるため、素手で作業する。青く染まった手は名刺代わりだ。

三代揃った染織一家。「ミンサー工芸館」館長の祖母・新 絹江さんを中心に、左は母・大瀧敏江さん。



大瀧 豪さん

●石垣島

八重山に 藍の文化を 咲かせたい

深夜、だらだらホームページをのぞいていたら、某ブログの「八重山のキムタク」という記述に思わず目が釘付けになった。「1」ときた私。そして、たぐりよせたのが、この人だった。

青い手が名刺代わり

石垣島で「島藍農園」を営む大瀧 豪さん（34歳）。島に昔から伝わる藍を育てて、伝統的な藍染めをしているという。市街地から車で10分ほど。前勢



岳をかなたに望む、なだらかな傾斜地にある小さな農園は、のほほんとしたムードが漂っていた。2匹の犬「バンダ」と「インディー」の盛大な吠え声の歓迎を受けながら染め場に行くと、真っ黒に日焼けした大瀧青年がいた。図体が、で、でっかい。そのうえ顔も、あまりに黒過ぎてキムタク似かどうか判然としない。嗚呼……。フト視線を落とすと、大きな手が真っ青だった。手も藍染め？「布を染めるとき、藍の具合や布

の感触を、素手で確かめた方が、仕事しやすいんですよ」と、こともなげ。藍畑で作業を手伝っていた島の農業青年いわく、「僕も初めて会ったとき、握手を求められたけど、もしや病気？と躊躇したほど、衝撃的な手でしたね。でも、最近では、手が白いと『仕事してないの？』と（笑）」「どこに行っても、そう言われるようになりました。だからこの手は、僕の名刺代わりです」大瀧青年が栽培しているのは、ナンバンコマツナギと呼ばれるマ

メ科の植物（通称インド藍）。種から育てて枝葉を刈り取り、発酵させて藍の色素を抽出し、「泥藍」と呼ぶ染料にして、布を染めて製品化する。沖縄の藍染めといえば、琉球藍が有名だが、八重山ではこのナンバンコマツナギが、ミンサー帯などの伝統的な染織に使われてきたという。が、近年は、小浜島で自家用にほそぼそと栽培されるにとどまっていた。

町の暮らしに憧れて

石垣市で3人兄妹の長男として復帰の年（1972年）に生まれた。いわゆる「復帰っ子」だ。母の敏江さんが、祖母がおこした「ミンサー工芸館」を手伝っていたため、放課後はおっぱら工芸館で遊んだ。「だから、染料の匂いだとか機音のリズムが、知らず知らずのうちに身体に染み込んでいたと、自分でやりだしてすごく感じました。研修で初めて機に座ったときも、感覚で織れちゃうんですよ。他の人の3倍くらい早く」幼稚園も小学校も島の私学のミ



1日2組まで藍染め体験ができる。この日は大阪から観光で来ていた女性がストールの藍染めに挑戦。



仕込んだ藍は「藍の華」と呼ばれる泡が立つと染め時。手織りの木綿布に染めるのが一番好きだという。



農薬や除草剤を使わずに、有機肥料で藍を育てている。そろそろ花が咲き始めたので収穫ももうすぐだ。

卒業後、祖父母や両親の「島へ帰れコール」をよそに、在学中からアルバイトしていたホテルのバーテンダーとして就職した。「もともと人見知りだったのに、カウンターでお客さまに接するうちに仕事が好きになって、将来何をするにしても、サービス業を知



オリジナル商品の藍染めのバッグや小物、手作り石鹸など。

心は「青く燃えている」という。そう胸を張る大瀧青年。藍を男子一生の仕事として八重山に根付かせ、藍の文化を花咲かそうと、

ツシヨンスクール、中学は長崎のミッシヨンスクールに進学した。精悍な風貌からは想像しにくいだが、案外、お坊ちゃま君かも。「子どものころ、島のテレビはNHKだけ。アニメも知らず雑誌も2週間遅れ。とにかく都会にすぐく憧れて、島を出たかったです」ところが進学した先は、中・高一貫教育のカトリックの男子校のうえ、規則の厳しい寮生活で、「まるで囚人のようでした」

っておいて損はない、と。マッ、遊びたかったのも本音です」寝る間を惜しんで、車にヨットに酒に、若いエネルギーを爆発させながらも、心の奥底では、こんなふうに思っていたという。「帰ったら、誰もやらない物づくりで起業しよう。だけど俺は金がかかっている。他人の10倍ぐらい金かけて育ててもらったんだから、人並みでは駄目だよ、と」

試行錯誤で藍をつくる

26歳で帰郷。ミンサー工芸館の企画を手伝いながら、すでに染色家として活動していた妹と工房を立ち上げた。芭蕉や苧麻などの天然繊維をとり、島の植物で染色をするうちに、「これだ！」と手応えを感じたのが、島の藍だった。町の暮らしに憧れた息子の14年ぶりの島暮らしに、母・敏江さんは少し不安もあったという。「島で育たなかったもので、伝統文化や行事を知らずにきたことを心配しましたが、帰ってきたら、積極的に島の隅々まで知り尽くしたいという意欲を感じました」



布やボタン、糸などの材料や、さまざまな洋裁の道具はインターネットで購入。

島の仕立て屋さん

石垣島から約30分で日本最西端の与那国島に到着。11月のこの日、台湾に近い南の島は思いのほか寒かったが、空港に出迎えてくれた田頭瑠都さん(27歳)の満開の笑顔に、心がホッと温かくなった。

瑠都さんは島の小さな仕立て屋「プレタポルテ衣瑠都」のオーナー。「化粧したのは、大学の入学式1回だけ」というスッピンの子

東京で服装学を専攻

祖納集落にある自宅兼店舗は、築89年の2階建ての赤瓦家で、まるで料亭のような趣がある。隣の母屋はもつとすぐくて築108年。曾祖父の代には百貨店だったとか。運動会ができそうなほど大きな家に、瑠都さんと父母の3人暮らしとは、うらやましい。

父が作ってくれた木の看板のある仕事場。



田頭瑠都さん

●与那国島

与那国島のプレタポルテ

や補修はもとより、運動会のゼッケンや鉢巻き、すだれやトランポリンの修理といったユニークな依頼も舞い込んでくるという。

「たとえば40代の女性が擦り切れたジーンズを持ってきて、『私の尻にフィットしているから、まだまだ着たい。どーにかしてよ』という。私は『もったいない』という強い思いはドラマだと思っんです。だから、私でよければそのドラマに華を添えましょう、と」

その人が選んだ色糸を使って補修したジーンズは、裏のあて布を

必死で本を読んだり……」

偶然、石垣島で長年制服作りに携わってきたおばあさんに出会い、「制服のツボをすべて伝授されたんです。この師匠なしには、私は作れなかったと感謝、感謝です」

今では島に2校ある中学校の制服指定店になり、昨春の新1年生からは、2校とも瑠都さんデザインの制服になっている。

「学校やPTAとも何度も話し合ってたデザインや値段を決めました。3年間、やっぱり、気持ちよく着てほしいし、制服に誇りをもってもらいたいから」

06年5月、役場のアルバイトを辞めて「プレタポルテ衣瑠都」をオープン。以来、ドラマのある服作りにこだわってきた。なかでも忘れられないのが、母親の法事に、母が残した着物を改造したかりゆしウエアを着けたという3人の息子からの依頼。穴があくほど弱った着物は、亡き母が、戦地に行く父に持たせるために手織りした思い出の着物だという。たつての願いを聞き、徹夜で仕上げてなんとか間に合わせると、翌朝、「皆でやってきて大喜びしてくれた。『ああ、ドラマの完結だあ』と、ひとり酔いしましたね」

車いすのおじさんから、冠婚葬祭にも着けられる上下を依頼されたときも、燃えた。もともと介護服に興味があっただけに、着脱が容易でオシャレなデザインを考え、

毎夕走るのが日課。昨秋の与那国島一周マラソンは女子第2位。



3回も4回も仮縫いして体ピタリに仕上げて感激された。

「もう、万歳、万歳ですよね」1ミリをおろそかにできない性格だから、依頼者と何度も話し合い、仮縫いを繰り返して完璧に仕上げていく。

「だから、島にいる人からしか、注文は受けないんです」

話を聞いているうちに夕方になった。保育園のキッズたちが島の伝統の織物、花織やドゥタティを使った衣瑠都デザインの子ども服を着て遊びに来てくれた。超カワイイ。だけど1秒たりともじっとしていない。カメラマン氏の必死の撮影ぶりに笑いこけながら、瑠都さんが将来の夢を語ってくれた。「島の織物を使ったオリジナルの子ども服で、島の子どもたちがモデルになったファッションショーを開きたいと思っています。オリジナルの草木染めのかりゆしウエアもつくりたいし、ゆくゆくは衣瑠都ブランドとして島から発信していきたい」

なんと、「パリコレ」ならぬ「ヨナコレ」。これはすごく楽しそう！



八重山毎日新聞通信員の父・政英さん、町役場勤務で「おはなし館文庫」を主宰する母・恵子さんと。



衣瑠都デザインの制服は機能性抜群でコストも抑えてある。左が久部良中、右3人が与那国中の生徒。



島の伝統織物で作った子ども服は大評判。左は絹の花織、右3人は木綿のドゥタティのワンピース。

24歳で帰島。役場の臨時職員をしながら服の直しなどを引き受けるうちに、中学の制服のための採寸を頼まれた。以前は石垣島から業者が来ていたが、生徒数の減少で採算が合わないのだという。そんな折、1人のお母さんから「どうせなら採寸だけでなく、娘の制服も作って」と依頼された。

「1着だけならと思ってOKしてからが大変。制服なんて作ったことないから、解体して研究したり、

ドラマのある服作り



南大東島で採取される琉球石灰岩で作った立派な石敢當。

沖 縄本島から東へ372キロの南大東島は、「絶海の孤島」と表わされることが多い。が、何度か訪れた印象では、孤島というわりに、島人は明るくのびやかで、好奇心いっぱいの人々のラテン的気質の人がたくさんいる。それは、約100年前、無人島を開拓した先

人のフロンティア精神が、今もどっこい生きている証かもしれない。
槍や盾まで何でも作る
「マーサ」こと、池田正信さん(45歳)もそんなひとり。とびつきりユニークな島の名物男だ。
本業は大型トラックの修理工だが、渡された名刺には「うみなんちゅ」と、肩書きが大書されていた。本人いわく「年中、海の近くをウロウロして

た第一印象は、色が黒い！ おまけに、風貌も無国籍風でワイルド!! 私が映画監督なら、アクション映画に即採用という感じのインパクトの強さだ。巨大なトラックの心臓部を、目をギラギラさせながら点検する姿は、まるでジャングルで獲物を狙う野生人のようだ。
「10年20年落ちで島に来る中古車が多いし、海風でサビサビだから、ネジも簡単に外れんさね」
嘆きながらも、機械いじりが好きでたまらない様子だ。ふと後ろを向くと、羽根がクルクル回ると赤い豆電球がピカピカ光るおもちゃのようなものを発見した。

「クーラーや車の廃材で作った風力発電さ。シャボン玉が出るやつも作ったけど、壊れちゃった」
よくよく見れば、工場の中は、仕事道具はもちろんのこと、石を彫る道具、魚やタコを捕る道具、廃材や漂流物など……、工作好き男子ならアドレナリンが駆け巡ること必至のアイテムが散乱している。このアナキーな工場は、あらゆる素材で「もの」を生み出すマーサの魔法の工場なのだ。

マーサのものの作りは、まずは必要なものを作ることから始まった。その代表が、島のあちこちで見かける手作り看板だ。
「以前は、島の名所に行くのに、全然看板がなかったわけさ。観光客がうろうろ迷ってかわいそうだから、看板立てたわけ」

ん)を獲得するのに、涙ぐましい努力をしたという。島に遊びに来るエーリーののために、わざわざ那覇にワインやピザを買い出しに行ったり、ときにモヒカン頭にして驚かせたり、得意の手作り品を贈ったり、あの手この手で喜ばせた。「ジャングルにいる、派手にダンスしてメスを誘う島と一緒にさあ」

最高傑作は愛娘
一緒にアジアやヨーロッパへも旅をした。都会が苦手なマーサは、都会でもつばらエーリーのSP役。ボルネオ島の奥地の村などに行くとがぜん張り切って、魚釣りや吹き矢の技の交歓会をしたと、うれしそうにエピソードを語る。
大好きなバリ島で結婚式を挙げた。当初は島と那覇の別居生活だったが、3年前に長女・七海ちゃんが誕生して、島と一緒に暮らし始めた。チュラカーギ(美人)などところは母親譲り、でも気質はマーサ譲りのワンパクな娘は、
「自分が作ったなかで最高傑作」ところが、最高傑作を生み出して以来、もの作りにおいては少々スランプが続いているのだそうだ。「だけどシーサーも作りたいし、バリ島みたいな灯籠や家も作りたい。まっ、海岸やごみ捨て場に行けば、何でもあるさ。皆、変人だと言うけど、僕のもの作りには口マンがあると思うけどね」
かくてマーサの宝島探検は続く。

いるからさ」。どうやら、ウチナインチュ(沖縄人)をもじってつけたらしいが、海に限らず、「島の隅から隅まで知り尽くしている」と豪語するこの男、あるときは、島の「もの」作りの達人であり、あるときは観光客のお助けマンとして活躍する。島のためにいいこと、面白いことは何でもするという、全身まるごと南大東島人なのだ。訪れたその日は、工場で10トントラックの整備中だった。出会っ



20代から毎日欠かさず綴ってきた分厚い作業日誌は、大切な宝物だ。

工場で仕事をしていると、観光客が「ここ、どう行ったらいいんですか?」としばしば尋ねてくる。それが看板制作のきっかけになった。それにとどまらず、自腹で自転車やマリンシューズを用意して貸したり、暇なときはガイドも買っ出て出るうちに、役場まで、「マーサに相談しなさい」と言うほどになってしまった。

「昔は役場に観光課がなかったからね。何で親切にするかって? 勉強はできなくていいから、頼まれたら人には親切にしないという親の教え。やがていい娘も来るから、頑張っって奉仕しなさいと親父やおふくろに言われて」

頑張っていたら、恵理子さんというよき伴侶を得ることになった。東京のOLから転身し、那覇で働いていた恵理子さんと、5年間の交際を経て03年に結婚した。「だけど内地の奥さんはタイヘンよ。やれ夕日見に行こう、朝日がキレイだっって大騒ぎして」
しかめ面しながらも、まんざらではない様子。聞くところによると、マーサはエーリー(恵理子さ

タイヤの直径が1m以上ある金属モンスターのような大型トラックの内部を、工夫した道具で整備。



い け だ ま さ の ぶ
池田正信 さん

●南大東島

そこにある材料で何でも作る島の名物男



防塵マスクもオリジナル。ガラスの曇り予防に空気が送られる仕組み。買うと高いので手作りしたそう。



料理も大好きなマーサ。板前用の和帽子にタイの少数民族の上着というナゾの扮装で得意料理を披露。



エーリーこと妻の恵理子さん、愛娘の七海ちゃんとオリジナル楽器のサンバリンや親指ピアノを演奏。

当初は素朴なヘタウマ看板だったが、今では島で採掘される琉球石灰岩を使った立派なものまである。そして頼まれれば、魔よけの石敢當や家の表札、石碑、さらには墓石まで彫ってしまう腕前だ。いす、テーブル、傘立て、バーベキューセット、呼び鈴、楽器、アクセサリ、ハンガー、ランプ、槍や盾、クリスマスツリー……。廃物や自然のもの、つまりタダの材料で作ったものは枚挙にいとまがない。極彩色のヤモリを作り、壁やトイレにひそかに貼って、島人や観光客をビックリさせるのもお茶目なマーサの仕業だ。廃物利用の天才は、海に漂う困りもののコルタールまで、自分で編んだロープの防水剤として再利用するというから、アツパレだ。

観光客のお助けマン

サトウキビ農家の4人兄弟の長男として生まれた。子どもの頃から大の機械好きで、6歳のとき、親に隠れてバイクに乗ったこともあるという。中学卒業後、本島の沖縄水産高校へ。卒業後、警備会社を経て、車の修理工場に就職した。「タンクローリーの修理工場で、先輩が、技術を全部教えてくれた」28歳で帰島したのは、「漁港の建設が始まるから、ダンプの整備ができる人も必要」と誘われて。以来、日中は整備工場で働き、夕方からは「うみなんちゅ」生活。



自信作のテレビチ（豚足）バーグと、黒胡麻担々鍋。

金城良次さん

●沖縄本島

居酒屋界の若大将



総料理長の城間 孝さんと料理を試作。テレビチ（豚足）バーグや黒胡麻担々鍋（右上写真）は最近の自信作。

10代
「前略おふくろ様」に強くひかれた。このテレ屋な板前の青年を主人公にした人間味あふれるドラマへの憧憬が、やがて自らの夢になり、現実になり、県内屈指の繁盛飲食店の経営者になった。「オフィスりょう次」代表取締役の金城良次さん（48歳）。昨春20周年を迎えた「居酒屋野郎りょう次」をはじめ、「十いち屋」「あしびうなあ」「門」、琉球新麺「通堂」など、

お客さまの顔見るのが大好きなんです。だから今もできるだけ、どこかの店に出て、料理もするし、皿洗いでも何でもしています」
21歳で店長を任される
コザ（沖縄市）で生まれ首里で育った。5人兄妹の真ん中。テラ―だった父の教えはスパルタ式で、「5台あるミシンに油をさすのが子どもたちの役目だけど、サボると『ミシンも生きているから、ご

はん食べないといけないんだ」と言って、ミシン油を飲まされたり、兄弟喧嘩が見つかる、どちらかが勝つまで徹底的にやらされるので、父を見たらあわてて喧嘩を止めたり。とにかく怖かった」
10歳のときに父が病で亡くなったからは、母がテラーの下請けやホテルの皿洗いをして一家を支えた。良次少年も新聞や牛乳配達などのバイトに励んだものの、中学生のとき、ちょっとハグレて、「母が何度か学校から呼び出された後に『人様に迷惑をかける子を産んだ覚えはない。あんたを殺して母ちゃんも死ぬ』と。そのときハツとして少し変わりましたね」
高校の夏休みにスナックでバイトして料理に目覚め、「前略おふくろ様」の影響もあって、3年生のときに中退。姉を頼って神戸へ行き、居酒屋でバイトを始めた。「活気があって、『へい、お待ちい』『今日は〇〇が入ってますよ』と、スタッフも生き生きしていました」
皿洗いから始まり、2年半で、焼き物、揚げ物、刺身も引けるようになった。成人式で帰郷したおり、昔のバイト先の女性経営者に見込まれて、居酒屋を始めるので任せると、いきなり大抜擢された。赤瓦家の居酒屋「りゅうび」で21歳の店長は、おばちゃんからチャンプルーやラフテーを教えてもらい、ただひたむきに仕事した。おかげで店も繁盛した。



市場に行くと、「良次さん！」とあちこちから声がかかった。今も買出しは大好きな仕事だという。

「そのころ、よく夢を見たんです。実際の店は平屋なのに、夢では2階があって『なんだ、ここにお客さまを通せる』と。とにかくお客さまを帰したくなかったですね」
一時、迷いが生じて、教材の訪問販売の仕事に就くが、すぐに向かないと悟る。そして「いつか一国一城の主になろう」と貯金に励み、28歳で念願の店をもった。

裏街道が好きなんです



すしも握れば皿洗いもする。居酒屋で働く良次さんは、水を得た魚のごとく生き生き元気いっぱいだ。

「担保はやる気です」と、借金してオープンした「居酒屋野郎りょう次」は、那覇市の久茂地川沿いにひっそり佇む。その後の店舗も含めて、良次さんが出す店は、決して人通りの多い場所にはない。「路地裏や隠れ家など、スキ間のような所が好きなんです。裏街道が好きなんです。俺は」
外はひっそり、でも店内は元気で楽しい居酒屋を目指して、あらゆる努力を惜しまなかった。

「全体に順風で商いを伸ばしてきた良次さんの、さらなる転機と飛躍のきっかけになったのが2001年。新横浜ラーメン博物館主催の1年間限定ご当地ラーメン創生企画に、見事選抜されたのだ。」
ラーメン界の「一風堂」で2カ月間、睡眠4時間で修業し、ラーメンを体で覚えた。その後、ラーメン界の大神所に鍛えられながら、新ラーメン作りに挑んでいた。頑固親父で有名な某御仁からは、「麺に思いが入ってねんだよ。女性のおっぱいもんだことねえのか？」 麺だって生きてるんだから

優しくもんでやれッ」
櫂を飛ばされ、悔しい思いをかみしめながら頑張った。「朝11時から夜11時まで、お客さんがとぎれない。とんでもない所に来たと思いましたが、ラーメンに情熱を燃やす人たちとの交流は人生最高の時間でした」
とはいえ、沖縄の店や3人も子どもがいる家庭を1年間も放り出すのは、あまりに無謀なのでは？「いや、妻も応援してくれましたよ。ノートと筆箱を渡されて『絶対、宝もつてきてね』と送られた」
な、なんと。俄然「妻」への興味が増した私は、無理を言っておわせてもらった。姉御肌でテキパキした感じの優子さんいわく、
「（ラーメン博物館の話は）宝くじに当たるよりうれしかったですよ。この人には商売の神様がついてるんです。その第一発見者が私。それに気づいた私が、反対するわけないじゃないですか」
アッパレな賢妻ぶりだった。成功して帰郷すると、お母さんも「『あんたを産んでよかった』と言ってくれた。『殺す』から『よかった』まで30年かかったけど」
なんと女運のいい人だろう。その上、商売の神様までいるとなると、向かうところ敵なしだわい。日暮れて、「りょう次」を訪ねると、「らっしやいッ」と威勢のいい掛け声とともに、居酒屋野郎・良次さんの満面の笑顔に迎えられた。



妻の優子さんと「通堂」の前で。店の看板や車などに描かれた温かみのある文字や絵は優子さんの作。

「とにかく『オッ』という言葉を開きたいので、喜んでもらえることは何でもやろうと思いました」
そうした姿勢を見て、友人知人から「うちの場所でも商売しないか」といった誘いがつきつき舞い込み、



妻の手紙や子どもの写真、ノートなど、良次さんの大切な宝物。

「気がついたら、10店舗になっていたんですよ」
31歳で結婚。同い年の優子さんとは、もとは高校の社会科の教諭で、「りゅうび」の客でもあった。優子さんのどんなところに魅力を感じたのですかと尋ねたら、
「ロシアがどうなってるのか、世界情勢を教えてください、それを聞くのが好きだったんです」
「???」
全体に順風で商いを伸ばしてきた良次さんの、さらなる転機と飛躍のきっかけになったのが2001年。新横浜ラーメン博物館主催の1年間限定ご当地ラーメン創生企画に、見事選抜されたのだ。」
ラーメン界の「一風堂」で2カ月間、睡眠4時間で修業し、ラーメンを体で覚えた。その後、ラーメン界の大神所に鍛えられながら、新ラーメン作りに挑んでいた。頑固親父で有名な某御仁からは、「麺に思いが入ってねんだよ。女性のおっぱいもんだことねえのか？」 麺だって生きてるんだから



元気になったカンムリワシを放鳥する。

子牛にワクチンを注射する。診療はとにかく早業だ。



ひら た かつ お 平田勝男さん

●石垣島

石垣牛から カンムリワシまで。 島の獣医は大忙し

「牛が死にそうだからよ」
SOSの電話が入り、の
っけから重体の子牛の往診に同行
することになった。診療道具一式
を積み込んだ軽自動車飛ばして
畜産農家に駆けつける。ぐったり
横たわる子牛に聴診器を当てるな
り、平田勝男さん（53歳）は「ああ、
駄目だ」とつぶやき、肩を落とした。
生後1週間ほどの子牛は、下痢

で衰弱して短い生涯を終えた。
「生まれてすぐの子牛は、下痢や
肺炎を起こしやすいから、要注意
なんです。もっと早くに知らせて
くれたら助けられたのによお」
いかにも悔しそうな表情の奥に、
プロとしての矜持（きょうじ）がほの見える。
平田さんは「平田家畜病院」院長
にして、八重山獣医師会会長を務
める石垣島の獣医だ。

畜産の島を陰で支える

ひと口に獣医といっても、犬猫
のような小動物から牛馬のような
家畜まで、扱う患畜（こうしゆ）というのだ
そうだ）はさまざまだが、平田医
師の場合は9割以上が牛だという。
「そのうち7割が子牛です」
言葉で訴えることができない牛
たちの異変をいち早く発見できる
かどうかは、育てる農家の行き届
いた観察力にかかっている。
「僕（おれ）なんかは病気の牛は目を見れ
ばわかる。目力（めぢから）がないんです」

東京の日本獣医畜産大学（現日
本獣医生命科学大学）卒業後、沖
縄県の中央家畜保健衛生所を経て、
26歳で帰島。農業共済組合の八重
山家畜診療所に勤務する。2年後
に、高校のハンドボール部の後輩
と結婚。1男3女に恵まれる。
「当時は八重山全体で6000頭
ほどしかいなかった牛が、右肩上
がりが増えて、今では3万800
0頭ぐらいいるんじゃないかな」
全国のブランド和牛の肥育地と

石垣市生まれのワンパクなスポ
ーツ少年が、獣医の道を目指すき
っかけになったのは、八重山高校
で青春を謳歌（うたが）していたころのこと。
「当時の市長が、『将来、八重山
を畜産の島にしたい。そのために
は獣医も育てないといけない』と、
市役所に勤めていた親父たちに熱
心に説いたようなんです」

病氣に対する注意だけでなく、
農家にとって大事なものは、雌牛の
妊娠・出産。子牛が増えないと、
畜産経営が成り立たないからだ。
妊娠鑑定（にんしんかんてい）の正確さから「ゴッド
ハンド」と呼ばれる平田医師。
「36歳のとき、1日に188頭の
妊娠鑑定をしたのが最高記録。肛
門から手を入れて触感で鑑定する
んだけど、そのときは手の感覚が
なくなっちゃったほど。獣医は、
産婦人科から小児科、外科、内科
……と、あらゆる治療ができない
といけない。『獣医は十医』といわ
れるゆえんです」



由布島の水牛の妊娠鑑定中。かつて農耕用に大切にされた水牛は、今はほとんど観光業に従事している。



八重高PTA顧問の平田医師。親同士の交流は親密で、話し合いを終えたあとは民謡酒場で盛り上がる。



八重山最強のハンドボールチームのオーナー兼監督を務める。石垣牛で選手を「餌付け」して優勝に導く。

して、また美味で評判の「石垣牛」
の産地として飛躍的に発展してき
たことが、頭数にも表れている。
44歳で独立。病院を開業するに
当たっては、妻の文枝さんがトリ
マーの資格をとって応援した。
「帝王切開のときなども、家内を
連れていきました。あうんの呼吸
で助手を務めるし、ガミガミ怒っ
てもへこたれないから」
肺炎の子牛、下痢の子牛、足に
腫瘍（しゅよう）ができた牛……次々往診して
いく。肥育専門農場の「美崎畜産」
では、子牛10頭にワクチンを接種。
清潔な牛舎に400頭もの石垣牛
が並んでいる光景は、なんとも壮
観だ。社長の美崎伸栄さんに平田
医師のことを聞いてみた。
「八重山の人だから、島の風土を
よくわかっているのが心強いし、
農家の経営のことも考えてくれる
から、全信頼を置いています」
農家の経営への配慮とはこうい
うことだと、平田医師が続けた。
「たとえば、何カ月も治療して病
気が治らなかつたら、農家は時間
とお金を損するわけです。牛はあ
くまでも経済動物、農家の財産だ
ということを知っていて、病状をピ
シャッと伝えないといけない」
どうやら、この「ピシャット」と
いう言葉は、きっぱりとした性格の
平田医師の口癖らしい。
「夕方からペットの犬猫の診療を
しているけど、つい、牛と同じに
『これは治らない』とピシャット

言ってしまうことがあるんですよ。
だけどペットは家族の一員。家族
の悔いが残らないような延命治療
が必要な場合もありますね」
水牛車で往診に
翌朝。平田医師が治療したカン
ムリワシが放鳥されると聞いて現
場に駆けつけた。カンムリワシの
幼鳥は、弱って道端にうずくまっ
ているところを保護されたものだ。
「最初は、衰弱してエサも食べら
れず、点滴して体重を増やしたん
だけど、大きくなったなあ」
噛みつきそうな顔で人間を睥睨（へいげん）
した鳥は、大きくカーブを描いて
森に消えていった。
国の特別天然記念物のカンムリ
ワシやイリオモテヤマネコなどの
野生生物の保護も、八重山の獣医
の大切な仕事だ。とりわけ、10
0頭前後といわれるイリオモテヤ
マネコの保護には、九州の獣医師
会あげて取り組んできたという。
「ローテーションを組んで、野良
猫の無料避妊手術を行っているん
です。野良猫が増えて山に入っ
たりすると、フンなどからイリオモ
テヤマネコに病気が伝染する危険
性がありますからね」
この日も大忙しの平田医師は、
島のあちこちへ車を駆って東奔西
走。走行距離は1日平均150キ
ロにも及ぶという。
「牛は病院に通院できんからね」
午後、西表島に渡る。港には由

布島から迎えが来ていた。由布島
観光を支える水牛の診察が目的だ。
「首に腫瘍（しゅよう）ができた水牛がいるの
と、妊娠しているかもしれない雌
が何頭かいるようです」
ユラユラ揺られながら水牛車に
乗って往診するなんて、なんだか
のどかな気分になってくる。が、
それもつかの間、由布島に着くな
り、平田医師はあわただしく診療
を開始した。ケージに追い込んだ
水牛の肛門に、ピンル手袋をし
た腕を突っ込む。驚いた水牛がド
バドバと大量の排泄物を放出する。
迫力満点の光景に目がテンになる。
「これはついでです。妊娠3カ月」
「これはついでません」
平田医師のお告げが続く。夕方、
石垣島に戻っても往診は続いた。
「今日の最後は雄牛の去勢手術。
雄は4カ月から6カ月の間に去勢
するんです。（カメラマン氏に向
かって）ついでにやりますか？」
思わず怯えるカメラマン氏。そ
れにしても、なんとまあ濃い1日
だったろう。平田医師は、まさに
猛牛のようなエネルギーで八重山
の動物たちと向き合う熱血獣医だ。



軽自動車の後部荷台を開けると、臨時家畜診療所に早変わりする。



外間さんのこだわりの結晶、ホットとアイス。

外間也蔵さん

●沖縄本島

珈琲と風と歌 こだわりつつ 自由に生きる

うな店「原点」は、店主の外間也蔵さん（61歳）が「確かな味の追求」を目指して開いた珈琲専門店だ。扉を開けるとまず目に飛び込んできるのは、一見、お坊さん？という風貌の店主と、流麗な墨書きで長々と書かれた店のポリシー。ハテ？ここは禅寺かと一瞬緊張が走るが、店主の気さくな笑顔で一気になごやかムードになった。「珈琲だけの店」ゆえ、メニューはホットとアイスの2種類のみ。飲み方にもこだわりがある。

集団就職で千葉県へ

与那国島で8人兄弟の次男坊として生まれた。島には高校がないため、中学2年で那覇へ。那覇高校に入学し、合唱部に入ったことでクラシック音楽に開眼する。

卒業後、集団就職で千葉県へ。旋盤工として働きながら、休日は当時流行していた東京の名曲喫茶に入り浸っているうちに珈琲のとりこになる。当時の東京は、生豆を自家焙煎して供するこだわりの珈琲店が隆盛期にあった。いくつもの珈琲店を巡り、名店中の名店といわれる銀座の「カフェ・ド・ランブル」の珈琲に、外間さんは魂をわしづかみにされた。

「味がわかる人しか行けない、店主に声もかけられない雰囲気。まさに珈琲上級者の店でした」やがて喫茶学院で学び、何軒もの珈琲店で働きながら珈琲の淹れ方を習得していった。

沖縄 縄本島中部のコザ（沖縄市）といえば、基地の町であり、民謡やロックなどの音楽が盛んなチャンプルー（混交文化）の町として知られる。どちらかというと夜のイメージが強いこの町に、森の朝のごときすがすがしい店がある。

珈琲道を追求する

県道24号線をひよいと外れたくぼ地のような場所。アカギ林の深い緑と静寂に包まれた隠れ家のよう。県道24号線をひよいと外れたくぼ地のような場所。アカギ林の深い緑と静寂に包まれた隠れ家のよう。



手前は自作の焙煎機。独学で試行錯誤した日の思い出の品。

失敗の連続でしたよ」

店を「都会のオアシス」と位置づけた外間さんは、大好きなクラシックの演奏会を開いたり、頼まれればその場で独唱も披露。正月には故郷の与那国島の伝統的な風を手作りして飾るなど、人と人をつなぐ文化交流の場としても活用してきた。2年前、与那国風がファッションデザイナーの三宅一生氏の目にとまり、三宅氏が企画した「21世紀人」というタイトルの展覧会に於て東京（日本）に招聘された。久々に東京を訪れた外間さんは、かつて憧れの「カフェ・ド・ランブル」を訪ねた。

「店主の関口さんと1時間ぐらいお話ができたんです」と、憧れのスターに対面したかのように顔を上気させて語る。

昨年2月、30年続けたくすのき通りの店を道路拡幅のために閉店し、5月に現在地に移転した。再出発を機に、前の店では提供していたサンドイッチやストリート珈琲などをメニューからはずした。「自分の納得がいく珈琲だけを出したかったんです」

店を手伝っていた妻の節子さんが半ばあきれたという口調で、「珈琲も風も歌も、本当に自分の趣味にだけ生きている人です」翌朝9時。焙煎機の音とともに1日が始まった。毎朝、使う分だけ焙煎しているという。

午前10時。開店と同時に常連客が数名カウンターに並んだ。その一人、高宮城實さんいわく、「30年近く、毎日来てるんだよ。僕らは通称「族」って呼ばれているんです。カウンター族。朝になると、マスターの魔力にかけられてつい来ちゃう。まあ、中毒ですね。珈琲の味？わからんさあ」ちなみに、昼の族や夕方の族も生息しているらしい。

この店には、「原点デビュー」という言葉もあるそう。誕生した赤ちゃんが初めて店を訪れることを指すという。そういえば、昨日も、店におばあさんが赤ちゃんを連れて来ていた。東京の珈琲専門店ではあまり見かけない光景なので強く印象に残っていた。「2代、3代にわたって来てくださるお客さんも多いんですよ」ちなみに外間さんの夢は、「カジマヤ（97歳のお祝い）まで現役で珈琲を淹れること」なるほど。珈琲の香りを刷り込んで、子から孫へと珈琲ファンをつないでいく作戦か！36年後、道を極めた翁の珈琲、味わってみたいものだ。



与那国島伝統の風。妻の節子さんが持っているのが展覧会に出品した、セメント袋を利用した飛行機風。



おいしい珈琲を供する体力維持のために、閉店後、うるま市の自宅まで約8kmをジョギングで帰る。



作曲家・島袋正雄さん作の「一杯のコーヒー」を熱唱する外間さん。毎晩1時間の歌の練習が日課だ。



自家焙煎した挽きたての豆にお湯を注ぐと芳醇な香りが立ち上る。



1992年にアルバム「オトリー」を発売して以来、数々の曲を発表してきた。



今、 宮古島を旅すると、どこからか聞こえてくるのが「宮古まもる君のうた」だ。「トミーやこ、みやこ、まもる君」というフレーズが印象的で、思わず口ずさみたくなる。愉快なこの歌、じつは島の道路に設置された等身大の警官人形をテーマにした交通安全向上キャンペーンソングだ。少女ユニット「パニパニ」が歌う局地的大ブームのこの曲を、

僕はふるさとバカかな
長髪で細マッチョな体つき、モノトーンの服にとがったブーツは、さすが往年のロック魂のなせるわざかと思いきや、「いや、魂は宮古島です」と軽くいなされた。ところで、アイランダー・アーティストとは聞き慣れない肩書き

本格的な装置が揃うスタジオ。これまで制作した数々のCDのレコーディングもここで行った。



しも じ さとる 下地 暁 さん

●宮古島

宮古から発信するノンジャンルミュージック

だが、「島に根差しているんなことをやっていこう」という思いを込めたという。なるほど音楽活動だけでなく、ラジオ番組のパーソナリティーやイベントのプロデュース、スタジオ経営……と、名刺に書ききれないほどの仕事ぶりだ。「僕はねー、自分はバカだと思ってるですよ。なんのバカかって？ ンー、音楽バカ。いやいや、ふるさとバカかな。ふるさとに自分の

心の根っこを生やそうと思って帰ってきたときから、人生を島に捧げて突っ走っているんです」そう言っ、ふるさと宮古島への想い、父母への想いを、なんのてらいもなく熱うく語る。まさに「想いの塊」のような人は、島に戻って20年目を迎えた。

島の東部の旧城辺町長間集落で生まれた。サトウキビ農家の6人兄弟の末っ子は、貧乏だった遠い日のことを今も鮮明に覚えている。「僕は島の原風景を知る最後の世代だと思ふ。茅葺きの家に住み、はだしで学校に通い、井戸で水汲んで、イモで育った。お前は戦前の生まれか？ といわれるような暮らしでした。貧しい生活のなかで、唯一の楽しみがラジオから流れる音楽を聴くことでした」

小学1年生の頃、「漠然と、将来、歌を歌いたい」と思い、中学時代に先輩からギターの手ほどきを受け、教室の机を並べたステージでベンチャーズの真似事をした。

東京で音楽まっしぐら

高校は定時制に通い、昼はガス屋で働きながらバンド活動に明け暮れる。デイープ・パープルよろしくハードロックをガンガン演奏する一方で、家では1人、カーベントーズやサイモン&ガーファンのメロディーに心震わせた。卒業後上京し、自動車工場で働きながらバンド活動を再開。工場



毎週土曜日、45分間にわたってラジオの生放送でパーソナリティーを務めている。相方は長女の美波さん。



フェスティバル事務局長の栗國和伸さんと。ぬいぐるみは、妻の利加子さんお手製のクイチャーマン。



ドイツ村近くの宮古まもる君と記念撮影。歌のおかげでまもる君はすっかり島のアイドルになった。

80歳でも歌える歌を
15年ぶりに戻った島には、スタジオやライブハウスといった音楽的環境は何もなかったが、「なかったら作ればいい、と。と



20代後半は「Do-Do」というバンドでJポップを歌っていた。

「クイチャーフェスティバル」は、島の伝統の踊り、クイチャーを再認識しようというお祭りだ。「当時は、沖縄本島のエイサーが宮古のものだと勘違いしている子も多かったから、いやいや、足元にはクイチャーという伝統文化があるんだよ、と」

ところが思いがけない事態に陥った。売名だ、金もうけだといった誹謗中傷のために、お金がかさばり集まらないのだ。「ふるさとバカ」を自認する下地さんもさすがに心が折れそうになったという。「自分の想いにウソはないけど、正直つらかった。そんなとき、仲間の1人が、自分の土地を担保にして資金を作るよと言ってくれたんです。よっしゃ、こういうバカが1人でも2人でもいれば想いは通じる。やがては宮古島の面積を埋め尽くす想いの塊になるゾと元気になった。バカの本領ですよ」

蓋を開けたら900名が出演する盛り上がりを見せ、今では3歳から92歳まで総勢1500名が出演する大イベントに成長した。

島への熱い想いを抱き続けて20年。この節目の年に何をしますかと問うと、しばし天を仰いで、「ウーン、もっともっと島の伝統を掘り下げたい。先人が残した古謡、アヤグを自分というフィルターを通してやってみたい」

島の最深处へ向かって「ふるさとバカ」の想いは深化している。



長命草は海の近くの断崖などに自生する野草。島では昔から利用されてきた。

すぎもとかずのぶ

杉本和信さん

●与那国島

長命草で島おこし 熱い男が島を元気にする

現在1600名弱の人口の流出に歯止めをかけること。おじいおばあをフル活用してもうけさせたい。仕送り貧乏をなくしたい。長命草で島を絶対元気にしてみせる」と、ちよっと怖い顔で熱く語りまくる。なにやら選挙公約のようだが、この男の場合はまさに有言実行。わずか10年弱で長命草は島の基幹作物のサトウキビと肩を並べるほどに成長した。

ミラクル野草に賭ける

草はどうかとひらめいた。栄養成分を調べると、カルシウムや鉄分、食物繊維などを豊富に含むミラクル野草であることが判明。勇んで島外に売り込み、それに応じて80余の業者が来島したもの、結局商談は不成立に終わった。和信さんは、業者の接待で「接待倒れ」に陥る父に猛反発した。「いくら長命草が体にいいといっても、野草から種を採り、庭で2、3株植えている程度のしろものだったから、『モノも作らずに営業してどうする』と、親父とは絶縁の一手手前まで大げんかした」

反発する一方で、「もし大量に栽培できたら？」という思いも芽生え、農業好きの叔父とともに1000坪の畑で実験栽培を始めた。種をまき、苗を作り、挿し木を試み……試行錯誤しながら栽培や加工方法を手探りしていった。「おじいたちに聞いても言うことはバラバラ。なにしろ本格的に栽培したことがないから。これは自分でやるしかない、と。いつ種をまき、いつ収穫したらいいか、葉を乾燥するにはどうしたらいいかなど、あらゆることを試しました」

努力は実り、今や生産者約60名が約30ヘクタールの畑で長命草を栽培している。薬草園の専従スタッフも8名に上り、加工工場はフル稼働で生葉を乾燥させ、チップ化して出荷している。



薬草園の人々。杉本さんの左が妻の恵子さん、右端が弟の繁文さん。

日 本最西端の与那国島。よくよく晴れた日には、台湾の島影が見える国境の島で、長命草（ボタンボウフウ）の栽培で「島おこし」に奮闘する男がいる。

農業生産法人「与那国薬草園」代表の杉本和信さん（41歳）。草の栽培と聞いて、草食系男子をイメージしていたら、現れたのは目つきの鋭い肉食系男子だった。

「僕の目標は、島に産業を興して

長命草は、もともと碧海に臨む断崖にしがみつくように自生している島野草だ。潮風にも負けずに踏ん張るこの草は「1株食べると1日長生きする」といわれ、島人は昔から刺身のつまや味噌あえなどの食用にしていた。

長命草の価値に最初に気づいたのは、父の和章さんだ。10年ほど前、町役場の職員だった父は、当時ブームだった青汁の原料に長命

で育てたほうがいい。台風にもへこたれないし、栽培もサトウキビに比べたらずっと楽。だから年寄りにはもってこいの作物です」

子どもの頃、農業だけはいやだと思った男が、いつしか長命草は「島民の宝」と胸を張り、「与那国を有機栽培の島にしたい」と夢を語る農薬人になっていた。

義理人情にあつく

東京・三鷹市で3人兄弟の長男として生まれた。東京で生まれたのは、両親が現金収入を求めて出稼ぎ中だったからだ。大切な長男は、生まれてすぐに故郷の島で旅館を営む祖父母に預けられた。「だから、じいちゃん、ばあちゃんを親と違って育ちました」

両親が島に戻ったのは小学5年生の頃のことだった。ワンパク盛りの頃の夢は警官。一方で任侠映画にもひかれ、わけでも「仁義なき戦い」の主役の菅原文太に心をわしづかみにされた。「だから僕は、義理人情には今もすごい強いほうです」

石垣島の八重山高専卒業後、本島の沖縄国際大学短大夜間部へ入学するも、アルバイト先で仕事の面白さに目覚めて中退。その後、愛知県の自動車工場をはじめ、東京や那覇で各種のバイトを重ねた。「長男は、やがて島に帰るのが定め」と、24歳で帰島。役場の臨時職員を経て海運会社に就職した。

25歳で結婚。男の子に恵まれる。妻の恵子さんは2人の子をもつシングルマザーだったため、周囲は結婚に猛反対したが、

「押し切って出来ちゃった婚。20代はとにかく突っ走っていたから、人の言うことなんかまるで聞かなかった。今はだいたい落ち着いたけど」

突っ張り青年は、結婚後も家庭は妻に任せきりで、青年会活動に燃え、祭りや伝統芸能に燃え、島おこしの議論に燃えた。

資生堂との出会い

半ば意地で始めた長命草の栽培にメドが立ち、島のおじいたちに栽培を依頼したところ、

「頑固者ばかりで若造の言うことなんか聞いてくれない。これは低姿勢ではだめだ、怒らせたほうがいいと思って、わざと『作れないんだろ』と刺激したら、案の定、怒って意地で作り始めた。年寄りに育てられたから、年寄りのツボはお手のものなんです」

ところが実際にモノが出来始めると、販売という大問題にプチ当たった。長命草を入れたカステラやそうめんなどの加工食品を手当たりしだいに作ったものの、長命草自体の使用量はたかがしれている。「売る」ことの難しさに悩み抜き、交渉のノウハウを学ぼうと取引先の社長のかばん持ちとして全国を回ったこともある。そんなとき、健康飲料の素材を探して来

長命草を使った各種商品。左奥が資生堂の青汁とタブレット。



島した資生堂の担当者との出会いがあった。

「東京の会社だし、世界的な企業だから、人情のかけらもないに違いないと思っていたら、その担当者が毎月やってきて、『杉本君、君は何をしたいんだ?』と熱心に聞いてくる。僕はその人に惚れたし、向こうも僕に惚れたと思う」

まさに義兄弟の契りのような信頼関係を築くなかで、ドリンクやタブレット（錠剤）が誕生した。今や「与那国島に長命草あり」といわれるほどブランド化に成功し、さぞや自信満々だろうと思ったら、夜、居酒屋でフツフツぶやいた。

「島の将来を考えて眠れないことがよくある。続ける難しさを痛感するし、次の展開も必要だし」

島おこしのリーダーは孤独だ。翌朝、加工工場を訪ねると、長命草の青い匂いが充満するなかで、もくもくと作業する杉本さんの姿があった。ちよっと不機嫌そうな顔はまるでボクサーのようだ。島おこしに賭ける、ファイティング杉本。の「仁義ある戦い」のラウンドに終わりはしないのだ。



トランジットモール実施中の国際通りで、ラジオでコンビを組む西村悦子さんと。

浦崎政克さん

●沖縄本島

元警官にして 沖縄最高齢DJは、 国際通りの 生き字引

を発信するこの番組は、「コミュニティ放送といっても、今はインターネットで世界中の方が聞いてますんでね。先だってはアメリカからもメールが入ったし、北海道や東京からも反響があります。それだけに緊張しますよ」

82歳の現役社長

東日本大震災から1年の節目を迎えたこの日、浦崎DJは自らの戦争体験を織り交ぜながら、地域防災の必要性を静かに熱く語った。

（現在は相談役）、国際通りで最も古い土産品店「守礼堂」の社長として365日休まず経営手腕を発揮している現役バリバリのダンディなおじいなのだ。おまけに元警察官と聞いて、興味津々でライフヒストリーを聞かせてほしいとお願いすると、それから4時間余、大好物のコーヒードで喉を湿らせながらノンストップで語ってくれた。その抜群の記憶力にも脱帽だ。

軍国少年は東京へ

1929年、石垣島で生まれた。ルーツを首里の士族にもつ瓦職人の家の13人きょうだいの5番目に生まれた長男は、よくしゃべる活発な子どもだった。

ところが、尋常小学校1年生のときに悪性のマラリアに罹患。九死に一生を得たものの、後遺症の吃音障害に悩むことになる。

「友人にからかわれたりしたけど、子どもながらに『絶対治る』と確信していたから、笑われても気にせず、積極的に人前でしゃべるようにしていたら、何年もかかったけど、いつの間にか治りました」

戦争へ一直線に突き進んだ時代、大日本青少年団のリーダーを務めるほどの軍国少年だった浦崎さんは、高等小学校を卒業後、電気技術を学ぶべく東京へ向かう。（ここで、「軍人勅諭」を全部言いそうになったので、慌てて止める。）爆雷攻撃にあいながらたどり着



生放送中のDJ浦崎。

「こーんには、パーソナリティの浦崎です」マイクを通してソフトな声で語りかけるのは、沖縄の最高齢DJの浦崎政克さん（82歳）。那覇市のコミュニティ放送局FMレキオで、毎週土曜と日曜の正午から2時間の生番組「めんそーれ なはのまち」を担当している。国際通りに面したサテライトスタジオから、リアルタイムで那覇や沖縄の情報

「ときにはおじいグチになるかもしれないけれど、戦争を体験したおじい言葉で語り伝えることが大事だと思っています」目の前の国際通りは日曜とあってトランジットモール（ホコ天。パスのみ運行）を実施中。追悼のエイサーの準備が始まっていた。実は浦崎さんはトランジットモールの仕掛け人でもある。「国際通りの生き字引」ともいわれる浦崎さんは、長年にわたって国際通り県庁駅前商店街の理事長を務め



大きなシーサーが目を引く創業45年の守礼堂本店で、息子で常務の正利さんと打ち合わせ中。

いた東京では、学業どころか工場の勤労奉仕にひたすら明け暮れる日々。3月10日の東京大空襲にも遭遇し、「空襲オンリー」の日常におびえながら敗戦の日に至った。15歳の夏のことだ。「昼に工場のラジオで玉音放送を聴いてすぐに皇居に向かい、夕方まで泣いていました。それから工場に戻って、平たいヤスリを削って短刀を作ったんです」

なんと、アメリカ兵が上陸してきたら、刺し違える覚悟だったとか。寮長の涙ながらの説得で決意は翻したものの、当時、沖縄は全員玉碎したと聞いていたので、生きていてもしょうがないと思ったという。翌年、家族の遺骨を拾うべく、引き揚げ船で石垣島へ戻ると、港は黒山の人だかり。そこには弟や両親の姿もあった。

「僕はなんか知らんが込み上げてきて、思わず『大本营のバカヤロウ』と叫んでしまったんです」

この瞬間、浦崎青年の「戦争」が完全に終わりを告げた。

交通課一筋28年

18歳で沖縄本島に渡り、軍作業に5年ほど従事した後、警察学校に入学。「とにかく学びたい」一心で勉学に励み、卒業後、交通課に配属された。25歳で結婚。5人の子どもに恵まれる。以後、交通規制、取り締まり、各学校を回っての交通安全教育……と交通一筋。



琉球警察時代の浦崎さん。後方のパトカーは米国のフォード。

本土復帰の数年前から12年間は、ラジオで交通情報の発信も続けた。「今みたいに交通情報センターもないから、パトカーからの渋滞情報や事故情報を流したり、事故防止を呼びかけたり、一番多いときは1日に26回やりましたよ」

28年間の警察官時代、なんといつても大変だったのが、復帰6年目の1978年に実施された「730（ナナサンマル）。7月30日を期して、米国式の右側通行を左側通行に変更したのだ。

「私は安全教育と広報の担当でしたが、当時、43万台の自動車を前日の夜10時に規制して、翌朝6時からいっせいに動かそうと、本土からも応援が来たり、ボランティアも1万人が出ました」

1979年、50歳で退職し、妻の和子さんが営んでいた守礼堂の経営に本格的に携わると同時に、商店街の組合長にも就任。国際通りの町おこしに積極的に取り組んできた。電線の地中化、歩道の拡幅、トランジットモール、若いメンバーの提案でスタートし今では恒例となった「一万人のエイサー

踊り隊」のイベント……。店の経営も時代の波をキャッチして乗り切ってきた。ハワイから輸入したアロハに力を注いだ時代もあれば、米軍の放出品に力を入れた時代もある。一番の危機はアメリカ同時多発テロの後。

「テレビを見ていて、こりゃ観光客が減るぞと思ったので、翌日、会議を開いて、会員制のネット通販の道を開拓していったんです」案の定、店の売り上げは半減したが、通販が順調に伸び、今では会員数3万人にも上るといふ。

「従業員にいつも言っているのは、『商売は、モノを売るのはなく、心だ』と。だからうちの店舗には、無料の休憩コーナーもあるし、国際通り600店のなかで、『トイレもご自由に』と張り紙してるのは、うちぐらいかしれんなあ」

DJは、3年前、「那覇のコマースシャルになれば」という思いで始めたが、今では商売と並ぶ生きがいになっている。

「戦後生まれの人たちに、アンヤタンドー（あんなだったよー）と戦前や戦中の話を語り継ぐのも私たちの責任。いつまで続けるの？と言われるけど、『1+1=2』と言える間は続けますよ。大嫌いな言葉は『余生』。人生に余りはない死ぬまでぎりぎり生きなさいと」力強く語る浦崎さん。社長席の後ろには、こんな標語が張られていた。「加齢を華麗に」。



久米島の自然、歴史、文化に触れることができる久米島博物館。

沖 縄本島から30分ほどのフライトで久米島に到着。久米島では、「島まるごと博物館」を合言葉に、島の歴史や文化、自然を島内外の人々に学んでもらおうとさまざまな取り組みをしている。そんな「島の学びの場」の中心となっているのが久米島博物館だ。「久米島は小さな島ですけど、有形・無形の指定文化財が62件もある

ります。沖縄本島に比べて、戦争の物的被害が少なかったことと、島の人々が尽力してきたおかげで、宝物がたくさん残ったんです」館内の常設展示コーナーを案内しながら学芸員の宮良みゆきさん（39歳）が説明してくれた。

島への愛がにじみ出る

宮良さんは3名いる学芸員の1人で美術工芸や古文書を担当している。展示品の掛軸の前で、「中国からの冊封使の随行員が残した二百年も前の書です。筆致が

美しいでしょう」

民具コーナーでは、使い込まれて持ち手が細くなった鍬を示し、「道具はもの言わないですけど、こうした生活痕から、使った人の苦勞がしのべれますよね」しみじみ語る言葉の端々に、島に対する愛情がにじみ出る。

「実は私は本島出身です。久米島は父の生まれた島なんですよ」沖縄本島北部で生まれた。現在のおっとりとした雰囲気からは想像し難いが、兄と弟に挟まれて育ち、

超のつくお転婆娘だったという。3歳の頃、母が体調を崩して、1年ほど久米島の祖母に預けられたことがある。琉球王国時代から続く伝統的な絹織物・久米島紬の織り手だった祖母のトミさんは、みゆきさんにハサミの使い方を教えた。お転婆娘はハサミをつかんでいきなり自分の前髪をズバッと切り、祖母が機にかけていた反物をバサリと断ち切った。「今思えば、大変なことをしたんですけど、おばあちゃんは怒らなかった。自分が教えたんだから、と。すごいなあと思います」お転婆娘は、やがて読書好きで内向的な少女に育ち、東京の女子美術短大で陶芸を学ぶこととなった。刺激的で楽しい学生生活を送りつつも、沖縄の伝統工芸の美しさや島人の心の温かさなど、自分のルーツを改めて見つめ直していたときに、沖縄で米兵による少女暴行事件が起きた。

実はハードな仕事

「心が折れそうになりました。沖縄が大変なときに私は何をしているのだろう。今からでも遅くない。沖縄のために何かしなくては。私に何ができるだろう？」

切羽詰まって自問自答するなかでふと思いついたのが、久米島紬を織る祖母の姿だった。

「そうだ、久米島紬の後継者になろう。久米島紬しかない、と強く

思ってしまったんです」

織物についての幅広い知識と技を身につけようと、沖縄県立芸大を再受験し、染織を専攻した。「それからは織物まつしぐら。いろいろ学んだなかに、学芸員養成課程もあったんです」

2000年、開館準備中だった久米島博物館（当時は「久米島自然文化センター」）に就職した。「織物しながら学芸員もいいな」そんな甘い考えはすぐさま打ち

砕かれるハードな仕事が始まった。「行ったその日から、展示はもちろん、資料台帳の整理や寄託品の調査、窓口業務や事務作業など……」社会人経験ゼロだったため、敬語の使い方ひとつわからず、一時は電話に出るのも怖かったという。

「例えば、どなたかが博物館にものを寄託しようと思われても、チャランポランな若者が電話に出たら、預けたくなくなりますよね」礼儀の本を読み、失敗しながら学芸員の心得を身につけていった。

6月オープンに向けて、寝る間を惜しんで仕事に没頭する日々は、「何もわからないまま、走りながら考える状態でした。大学で『日本の学芸員は雑芸員です』と言われたんですが、まさにこれだ」と初代館長は、沖縄の民具研究で名高い、民俗学者の上江洲均さん。「モーレッツ館長で、常設展示だけではダメ、企画展をして人を呼びなさい、調査研究を外に知らせる

ために論文も書きなさい、子どもたちの教育活動もしなさい、と」

久米島紬の保護育成

開館から2カ月後の8月。久米島の名家・上江洲家に残るお茶にまつわる詩歌の企画展を任された。「幕末から明治の頃、久米島ではお茶が栽培され、品質もよく、当時の首里の知識人に珍重され、たくさんさんの詩歌が残されたんです」歴史が「全然ダメ」だったはず

の人が、ねじり鉢巻で年表を整理し、展示方法を組み立て、説明文を書き、パンフレットを準備した。2年目の春には、念願の「久米島紬―思いをつむぐ―」展を企画。「ものの展示だけでなく、作り手のことや、気が遠くなるような工程も知ってもらいたくて」カメラを片手に制作の現場を丹念に記録し、展示に反映させた。

「このとき、久米島紬のPRをするのが私の役目だと思いました」久米島紬の話になると瞳にキラリと星が輝き話はどこまでも――。「ところで結婚は？」

「28歳ぐらいのときに」



「FMくめじま」で定期的に博物館からの情報を発信している。

「将来、久米島紬を織りたいと書いている子もいますよ」と満面に笑みを浮かべるみゆきさん。もしかしたらみゆきさんは、3歳で断ち切った祖母の機の糸を1本1本つないで、心の中で久米島紬を織っているのかもしれない。

下・博物館地下の収蔵庫にて。右・みゆきさんが着ている上着は久米島紬。



宮良みゆきさん

●久米島

島の歴史と文化を発信する学芸員の仕事



巨大なアンガマの面が目を引く「興作のおもちゃ箱」。不思議な手づくりおもちゃが詰まっている。

目島興作さん

●沖縄本島

楽しい不思議がいっぱい「興作のおもちゃ箱」

おもちゃを制作している。風が吹くとシャボン玉がどんどんできるペットボトル製の「シャボン玉製造機」、アイスを食べた後の棒で作った竹トンボならぬ「スーパー赤トンボ」。指笛のような鋭い音が鳴る荷造りテープ製の「甲子園笛」。マジックグッズのような「アンビリバー棒」……。

そんな目島さんのユニークな発想の原点は子どもの頃に遡る。佐敷町（現・南城市）で生まれた。本名は興速。刑事の父は仕事で忙しく、もっぱら祖父の興明さんにかわいがられて育った。「おじいさんが、まさに仙人ワザだったんです。農具も手作りするし、何もない所でたちどころに火もおこせた。鳩やマングースを捕って食べたし、タコの巣が岩礁のどこにあるのかも、性質も、全部知っていた。知ること、作ることのすごさを教わりました」

祖父の薫陶を受けた目島さんは、小学2年の頃にラジオを制作した。「土でラジオの形を作って中にセミを入れておき、つまみをひねるとセミが暴れてジージー鳴く仕組み。単純なものだけど、友達は皆、『音がする』と不思議がった」

恐らくこれが「興作のおもちゃ箱」の出発点だ。図画工作が得意な少年は、やがて本名の興速ではなく「工作」と呼ばれ、それが現在の作家名・興作につながっている。勉強は嫌いだが、好きなものには徹底して取り組む姿勢は一貫し、工業高校3年生のときに、重量挙げで沖縄新記録を樹立したことも。「祖父も父も運動神経抜群で、『尚巴志（琉球を統一した佐敷出身の英雄）の子孫だという武士の誇りを持って』と耳にタコができるほど

沖

縄本島、南城市佐敷の国道沿いに、なんだか不思議な場所がある。入口のブロック塀には風車が林立し、巨大なアンガマの面（八重山の盆行事で使う面）が飾られている。ちよつとキッチュな雰囲気のはこは、玩具作家で発明家の目島興作さん（69歳）の自宅兼工房「興作のおもちゃ箱」だ。

身近な材料を使って

目島さんは、廃材や日用品で、思わず目が「?!」になるアイデア

とおもちゃを積んで、野球場などで売り歩いたものの、最初はさっぱり売れなかったという。話を聞いて、「せっかく建具職人の腕もあるのだし、高級な木工おもちゃを制作すればよかったのでは？」と言うと、首を振って、「私のおもちゃ作りの原点は『この廃材は何かにならないか？』というところから。経済的に恵まれていないからこそ、好奇心が旺盛になり、アイデアもやる気も湧いてくるんです」

廃材などで制作したおもちゃ。木製の知恵の輪は特許を取得。



おもちゃを積んで、野球場などで売り歩いたものの、最初はさっぱり売れなかったという。話を聞いて、「せっかく建具職人の腕もあるのだし、高級な木工おもちゃを制作すればよかったのでは？」と言うと、首を振って、「私のおもちゃ作りの原点は『この廃材は何かにならないか？』というところから。経済的に恵まれていないからこそ、好奇心が旺盛になり、アイデアもやる気も湧いてくるんです」

廃材や漂着物などタダの素材や日用品を使った目島さんのおもちゃは、徐々に評判を呼び、今では学校や公民館などに講師として呼ばれたり、県内各地や、ときには県外や海外のイベントで披露すること。工房も公開しているのので、夏休みなどは、観光客や園工の宿題を抱えた子どもたちが押しかけて、大忙しだという。

夕方、目島さんとともに那覇に住むお母さんを訪問した。92歳のキミさんは背筋もピンとして、驚異的に美しく元気な人だった。ひとしきり、案外おとなしかったという目島さんの子ども時代の話聞いたところで、ご本人いわく、「何で？ どうして？ が子ども頃から口グセだったから、バカバカしい体験をいっぱいしましたよ。例えば、人間は息をしないでいたらどうなるのだろうと思って、息を止めて酸欠で倒れたり、眠ら

なければ人生得するかと思って3日間寝ないでいたら、家具屋のベッドで爆睡したり……」

バカらしいことにも真剣に取り組んで、実際に体験しないと気が済まない一途なところが、目島さんの真骨頂であり、奇想天外なおもちゃを生み出す原動力なのかもしれない。キミさんいわく、「私は民舞や体操で忙しいですけど、あれ（興作さん）はあれで生き甲斐をとるんだから、いいんじゃないのと思ったりします。はい、応援したいと思ったりしますよ」さすがお母さん。

最後に、目島さんに将来の夢をたずねると、ひと言。「永久機関を完成させること」「????」

なんでも、地球の自転や引力を利用した永久に動くおもちゃを発展させれば、永久エネルギーが得られるというのだ。どうやら「なぜ、どうして精神」は、ますます壮大なスケールに膨らんでいるようだ。自身を「南城市の特産品」という目島さん。いや沖縄の、いやいや地球の特産品かもしれない。



那覇で一人暮らしをする母を週1回訪問。御年92歳のキミさんは、背筋もピンとしたカッコいいおばあ。



佐敷小学校創立130周年を記念して建立された地元出身の英雄・尚巴志像。企画やデザインを担当した。



南城市の観光施設「がんじゅう駅・南城」内の常設コーナーで、中学生たちに自作おもちゃを披露する。



「シャボン玉製造機」を制作中。





宜野湾市にある「LEQUIO」の旗艦ストア。

店舗スタッフの比嘉瑞希さんと夏のリネン服のコーディネート进行を打ち合わせる。



嘉数義成さん

●沖縄本島

沖縄から羽ばたくファッションブランド

基地の街・コザ(沖縄市)で生まれ育ち、子どもの頃から並外れて大柄だったことが、この人がファッションの道に進むきっかけになったかもしれない。

大人の女性の日常着

沖縄本島・宜野湾市。かなたに海が見える高台にあるショップを

訪ねると、身長184センチの嘉数さんが迎えてくれた。一瞬、ラテンアメリカの人? と思わせるほど濃いひげ面だが、笑うと案外あどけない童顔だ。

「沖縄から、洋服を通して、デザインやモノを発信していきたい」と、明快な志をもつ人は、大いなる夢をそのブランド名に託した。「琉球の大交易時代に、東南アジアなどで活躍した琉球人を、ヨーロッパ人はリユウキユウと発音で、勝手に『レキオ』と呼んだそうで



す。小さな島国でありながら、荒波を越えて外国と交易し、独自の文化を築いた先人への敬意を表してブランド名にしました」

手がけているのは、主に30代を中心に幅広い年齢の女性をターゲットにした着心地のいい日常着。県内のセレクトショップやリゾートホテルでも人気だ。

「毎日のように着て、着れば着るほど愛着のわく服を目指しています。色が褪めたりクタクタになっ



米軍の払下げ品を使ったキーケースやパソコンケースも販売。

ります。目の前で買うかどうかのシビアな選択をされるわけだし、体型は一人一人違うから、デザインも独り善がりではダメだと痛感しました。だから今は、スタッフと相談しながら作っています」

海外でショーを開催

白くてモダンな店内には、ゆったりしたリネンの服が並んでいる。「これは『リラックス』がテーマのラインです。亜熱帯の沖縄で着るなら、太陽の光を遮り、風を通すリネン素材がいいと思うんです。沖縄伝統の芭蕉布や苧麻の上布が最適だとは思いますが、あまりにも高価過ぎますからね」

もうひとつ、生産量は少ないが、嘉数さんの真骨頂ともいうべきラインが「MADE IN OCCUPIED JAPAN」(占領下の日本製)。戦後のある期間、日本からの輸出品に表記が義務付けられていた言葉を、あえて冠した米軍物のリメイクシリーズだ。

「軍物というのは、極限の機能性しかないデザインだと思うんです。

でもそれが、味になり、その人ならではの1着になるような……」だから、トレンドを先取りしてシーズンが終わったらポイントと捨てて次へ……という、いわゆるファッション業界のスタイルとは一線を画していきたい、とも。

「これがレキオのカタチだという定番商品を増やしていきたいし、以前に販売した服のリメイクの相談を受けたり、母から娘に『お下がり』するとか、次の代までも引き継がれるような、息の長い服作りをしていきたいんです」

25歳でブランドを作る

報道のビデオカメラマンの父と琉球舞踊家の母との間に生まれた。姉2人の末っ子長男は、甘えん坊で泣き虫でおとなしい子どもだった。育ち過ぎるほど早く育つて、越来中学の頃にはすでに現在の身長に近いノッポの少年になっていた。母の千枝子さんによると、「ステーキや焼肉が大好きでしたし、牛乳をお水がわりに飲みましたからね。小さい頃のタンパク質ってすごいと思います」

オシャレに目覚めた少年は、サイズの合う洋服や靴を求めて、米軍の払い下げ品屋や基地のフリーマーケットへせっせと足を運んだ。「中学のときに、お小遣いを貯めて、なけなしのお金で買ったデニムを今も愛用しているんですよ」美里高校の頃には、自分で麻縄

飾らない無骨な魅力。それと古着には誰かが使った歴史がある。古着のシミを『汚れ』と思うか『柄』だと思うか。僕は『柄』だと断言できるほど古着が好きなんです」何年前か、ある染織家から、「あなたの作る軍物の作品は大嫌い。戦争を思い出させるから」と批判された。そういう見方もあるのかと心にグサリと突き刺さり、以来、制作する意味を模索してきた。「戦争をしたくなくなる軍物」と無理矢理コンセプトをひねり出したこともあるが、今は、「元々の使用目的を考えれば負の遺産だけれど、あえてこの素材を使って本来の意図と違う日用品に変えて残していくことで、沖縄や基地や平和について考える、メッセージ性の強いシリーズにしたいと思っています」

最近、海外へ行くことが多い。韓国に材料を探しに行ったり、フィリピン系ハーフの美容師と一緒に昨年はマニラでファッションショーを開催した。直前に台風の甚大な被害があったため、「お祭り騒ぎはいかがなものか」という批判もあったが、考えた末に予定通り開催。熱狂的に歓迎された。そして募金活動で得たお金を医薬品に変えて被災地タクロバンに届けた。フットワーク抜群の現代のレキオは、船ではなく飛行機で、日本だけでなくアジアへ、そして世界へと軽やかに飛翔していきそうだ。



母・千枝子さんの曾祖母が織った100年以上前の芭蕉布の作業着を見て、伝統の底力に感激したという。



汗と埃の混じったにおいが充満する米軍の払い下げ品屋で、山積みのテント地から使えそうな布を選ぶ。



どんなシーンで活躍するか想像しながら服をデザインする。布にハサミを入れる瞬間が一番緊張する。



那覇の北西 60 キロのところにある粟国島。島の西端の筆ん崎は、海拔 100 メートル近い絶壁だ

波平雄翔さん

●粟国島

俺は離島のために生きる人間だ

落の課題や要望を調べ、行政と連携して地域の維持・活性化に取り組む相談員のことをいう。

「住んでみて痛感したのは、若者がいるだけで島が元気になり、笑顔が増えるということです」

特産品開発をお手伝い

那覇の泊港からフェリーで約2時間。「今はるる来る来たぜ」と思わず口をついて出るほど荒れが

ちな冬の海を渡って、粟国島を訪れたのは昨年11月のこと。赴任か



島

幼稚園の前を通ったら、園児たちが「なみへい!」「かずとん!」と口々にはやし立てて大騒ぎになった。食堂で偶然出会ったおばあは、「会えてうれしいさあ」と、ヒヤサツサと喜びの手踊りを始めた。まるでアイドルのような人気者は、波平雄翔さん24歳。粟国島の集落支援員として昨年末まで島で活動していた。集落支援員は2009年に設けられた国の制度で、過疎に悩む集

らわずか3年ほどで島人の心をガツチリつかんだ若者に、離任前に会ってみたいと思ったのだ。波平青年は、ジャニーズの「嵐」でいえば松本潤のように濃い顔立ちの、折り目正しい青年だった。「僕の場合は、特産品開発のお手伝いをしてきました。島の素材を使ったススキの帚やソテツの実のストラップ、それに中学生が考えたアイスクリーム……」

一生懸命説明する青年を前にして、それにしてもなぜ、大学を卒

業したての若者が都会を捨てていきなり離島を最初の職場に選んだのだろう?と疑問がわいてきた。

「僕自身が離島出身ですし、離島が大好きなんです。大学生のとき、伊是名島の古民家再生プロジェクトに参加して、ヤスリで壁を磨いているときに、ふっと啓示のように、『俺は離島のために生きる人間だ』と確信したんです」

生まれ島は多良間島

宮古列島の多良間島で生まれた。4人きょうだいの長男。父は自動車整備工場、母は畜産を営む共働きの家に育った。だから、

「週末は、おとう、おかあの手伝いをするのが当たり前でした」

小さな島では、保育園から中学まで、同級生14名がずっと一緒に、きょうだいのように育つ。

「島人が全員で、僕たち子どもを育ててくれた感じです」

15歳の春。高校のない離島の子どもたちは親元を巣立つ。雄翔さんも宮古島の宮古高校へ進学した。「不安よりも、厳しい親元から離れられるワクワク感が強かった。でも、全校生徒900名の高校で、『やばい、多良間の人口ぐらいいる。どうしたら友人がつけられるんだろう』と戸惑いもありました」

やがて「波平、お前一人暮らしなんだって?」といってアパートに友人が来はじめて、さらに「この人誰?」という知らない人まで



下校する小学生とおしゃべり。立ち話から島人との交流が始まるから、徒歩で集落内を行き来している。



島の名所「むんじゅる節の歌碑」が立つ見晴らしのいい場所は、島風に吹かれながら読書するのに最適。



毎年秋に那覇で開催される「離島フェア」で、おばあたちと粟国島の特産品の販売にいそむ。



中学生が開発に関わったAA(オール粟国)アイスとススキ帚。

作った組織です。今も後輩たちが継続して頑張ってくれています」

主役は島人、僕は黒子

2012年春、大学を卒業後、恩師のすすめもあって、粟国島の集落支援員になった。

「正直なところ、粟国の『あ』の字も知らなかったんですよ」

人口約760人の粟国島は、サトウキビと天然塩が名高いが、ほかにこれといった産業のない典型的な過疎の離島。故郷の多良間島に空気が似ていた。

「村の要望は、地元の特産品を作ってほしい、と。教育にはかわわってきたけど、『エッどうしたらいいの?』と思う、島の人と徹底して話すことから始めたんです」

区長、青年会、老人会……聞き取り行脚の過程で体重は10キロ増加した。カメラカメラ(食べなさい)攻撃のおかげだ。島の歴史を学び、マースヤーという旧暦正月の行事をはじめ、小学校での読み聞かせボランティアなどに積極的に参加するなかで気づいたのが、「一過性の特産品作りではダメだ。

主役はあくまで島人。島人が足元の宝物を見つけて特産品にし、それを都会につないで継続して育てていくネットワークが必要だ。その手伝いをする、黒子に徹するのが僕の役目だということです」

学生時代は「俺についてこい」タイプだったという波平青年だが、この3年で「あっちの意見、こっちの意見をきれいに丸めて和合をとる」(粟国農漁村生活研究会加工部の安谷屋英子さん)といわれるほど、何より島人の主体性と調和を大切にする人間に変貌した。

取材の数日後、那覇で開催された「離島フェア」に波平青年の姿があった。粟国のハッピを着て懸命にアイスクリームを売る姿に、島のおばあたちの冗談が炸裂した。「私があと50歳若かったら、どこまでも離さなかったさ」(76歳)

「波平くんに会うと身も心も若くなって18歳やいびん」(81歳)そしてため息混じりにいわく、「粟国の人だったら、縄でくくりつけても他島に行かせないけど、自分の島をとっても大切にしていくから、仕方がないさ」

というわけで、「故郷の多良間をもっと元気にしたい」という熱い思いの波平青年は、粟国島の任期を終え、那覇でネットワークを広げた後、念願の多良間島にUターンする予定だ。

元氣な若者がいる離島は、間違いない宝の島になるに違いない。



人気の「島豚ごろごろ」をはじめとしたゴーヤカンパニーの商品。

衛生管理が厳密な加工場で長ネギの仕込みをする。



BAGADA BANDのボーカルとして、翌日のイベントを前に炎天下でリハーサル。「石垣やいま村」にて。



妻の恵さん、息子の恵山くん、旭光くんと。忙しくても家族で食事する時間を大切にするパパだという。



毎週水曜日にFMいしがきサンサンラジオで生放送番組「ユクイどきトロピカtime」のDJをつとめている。

伊良皆 誠さん

●石垣島

食と音楽でやいまを盛り立てる

石垣島に、食品会社なのに音楽事業部門をもつユニークな会社があると聞いた。その名も「ゴーヤカンパニー」。

石垣市新川の会社を訪ねると、社長の伊良皆 誠さん(47歳)が迎えてくれた。ラフなボロシャツ姿で、およそ社長らしくない爽やか系の笑顔の人だ。

「社名のゴーヤは、ニガウリのやいま(八重山)の言い方です。沖縄本島ではゴーヤーとのばすけど、

島ではゴーヤで止めるんです」この一言だけでも「やいま」への強い思い入れが感じられる。伊良皆さん、実は元はプロのミュージシャン。従業員7名のうち3名も元々音楽関係者とあって、食と音楽を通して「やいま」を盛り立てていこうと奮闘中なのだ。

東京でデビュー

キリスト教会の牧師の家に、4人きょうだいの次男として生まれ

た。幼い頃は、母が海水で握る塩おにぎりが大好きで、賛美歌と歌謡曲が常に身近にあった。当然、島唄も好きだろうと思ったが、「大っ嫌いでした。両親が忙しくて、4歳の頃に弟のお守りをしながら留守番させられていたときにラジオからいつも島唄が流れていて、留守番Ⅱ寂しいⅡ島唄というトラウマがあったんです」

中学、高校の頃は80年代ポップスの全盛期。空前のバンドブームで、文化祭や卒業式といった学校

完成のまま。でも、あきらめず死ぬまでにできればいいや、と」

ゴーヤしゃき漬け、ゴーヤ珈琲など、ゴーヤに特化した商品展開をしたものの、農作物が原料の商品は、天候に泣かされることもしばしば。そこで泡盛の製造工程で出るカシジュエ(もろみ原液)を使った調味料や、乾燥がきく島唐辛子やピパーツ(島胡椒)など、島の素材をベースにした無添加調味料をつぎつぎに開発。音楽に注いだのと同じ情熱をもって食品会社の仕事に邁進してきた。

「東京で睡眠3時間で頑張るクセがついて以来、睡眠は3時間で大丈夫になってしまったんです。深夜、僕の自由時間に、新しい商品や音楽を構想します」

今年で10周年

会社を始めたころは、エクセルの使い方も、食品衛生法も、事業資金の調達法も知らず、全て手探りで学んできた。

「資金繰りがうまくできず、何度倒産しそうになったことか」山あり谷ありの経営がようやく



20代後半、ソニーミュージック時代の宣伝用アーティスト写真。

行事に出るためのオーディションまで催される時代だった。

「僕のバンドは常に1位通過でしたよ。ボーイ・ジョージの真似してメイクしたり……。だけど練習する所がなくて、友人の親の畑の肥料小屋を借りたら、シンバルの上でハブがとぐるを巻いていたり、音がうるさくて隣のブタ小屋の子ブタが死んでしまったと文句を言われたり。ブタが死ぬかあとに思いましたけど、すごくデリケートな動物らしいですね」

まさに青春グラフィティといった感じのエピソード満載だ。ちなみにBEGINや大島保克は1年後輩、新良幸人は同級生だという。福岡の九州産業大学経営学部に進学。当時の夢はジャズシンガー。卒業後、2年ほど島でスイカ畑を手伝いながら夜はライブハウスで歌う日々を送った。

1991年、CBS・ソニー主催のボーカルオーディション(応募総数1万2千人)で準グランプリを獲得。プロのボーカリストを目指して東京で暮らし始めた。ところがすぐにはデビューできず悶々として数年を送る。

「『頑張って来いよ』と島から送り出されたからには、そう簡単にはあきらめられないですよ」

アルバイトをしながら400曲ものオリジナル楽曲を作ってディレクターに猛アピール。96年によくやくメジャーデビューし、シン

落ち着いたのは、「島豚ごろごろ」を発売した2010年頃から。石垣島産の豚肉を使った味噌味のごはんの友は、今もヒットを続け、「♪島豚ごろごろ」と社員が合唱するCMソングまである。3年前には「BAGADA BAND」を結成し、第一弾のCDも出した。

「BAGADAとは、やいまの言葉で『私たち』の意味です。子ども頃、大嫌いだっただけの八重山民謡がベースのコスモポリタンミュージックなんですよ」

かつて故郷から遠く離れたとき、「やいま」の音楽や味に、計り知れないほど慰められた人は言う。「かまぼこや八重山そばのように島の定番になる食の特産品を作り、島の誰もが口ずさむ歌の特産品を作ること。その目標のために毎日1ミリでも前進していきたい」

健気に一生懸命突き進んで「ゴーヤカンパニー」は今年10周年。それにしても伊良皆さんのエネルギーは、いったいどこから湧いてくるのだろうか？

「島に対する使命感かな。食品と音楽で島の人に喜んでもらいたい、貢献したい、恩返しをしたい」

翌日、音楽イベントのリハーサル会場で「♪やいま、やいまー」と熱唱する伊良皆さんの姿があった。照りつける太陽に負けないほど熱いハートの持ち主は、100パーセント「やいま」でできているにちがいない。



子どもたちに太鼓を教えて四半世紀。

かわみ つひろ し 川満廣司さん

●南大東島

大東太鼓を島の伝統文化に

人々で成り立つ島には、本土と沖縄の文化が共存している。

八丈太鼓がルーツ

「大東太鼓碧会」の川満廣司さん（52歳）は、八丈島にルーツをもつ八丈太鼓に魅せられて25年。これまで200人以上の島の子どもたちに太鼓を指導してきた。本業は村役場の職員だが、精悍な体つきはまるでアスリートだ。

演奏を終えた川満さんが、汗び



つしよりでハアハア荒い息をあげながら解説してくれた。

「八丈太鼓は、同じリズムを刻む下拍子と、そのリズムに合わせつつも、自由奔放に感情を表現しながら全身で叩く上拍子の両面打ちが特徴です。いわば2人一組のアドリブ太鼓なんです」

なるほど。だから、まるでジャズのセッションのようなスリリングな醍醐味があるのだ。

「もともととは、八丈島に流人とな

った武士が、刀をバチに持ち替えて、望郷の思いを込めて打ったのが始まりだともいわれています。だから太鼓に『喜怒哀楽』の複雑な感情がこもっている。でも僕らの太鼓は、お祝いや宴席で叩くことが多いので、『喜楽』はあっても、『怒哀』がないんですよ」

それにしてもなぜ、沖縄系島民の川満さんが、八丈系島民が親しんできた八丈太鼓に取り組むことになったのだろう？

「安請け合いがきっかけです」

なんでも南大東村青年連合会長だった時に、製糖工場の記念式典に八丈太鼓を出してほしいと頼まれて気軽にOKしたところ、太鼓が叩けるメンバーのほとんどが、その日、島にいないことが判明。あわてた川満さんは八丈太鼓の基本の「き」を1週間かけて猛特訓し、度胸だけで舞台にあがった。

「それが、鳥肌が立つぐらい気持ちよくて、楽しくて、病みつきになってしまったんですよ」

南大東島の太鼓男が誕生した瞬間だった。毎日毎日練習し、島内外のイベントに呼ばれ、子どもたちに教えた。1991年、「大東太鼓碧会」を立ち上げる。

「真似事から出発しているんで、八丈太鼓を名乗るのはおこがましいと思います、大東太鼓としたんです」

そして、紺碧の大海に囲まれた大東島の限りない未来の可能性を、『碧』の文字に託した。



レセプション会場で相方の田仲康治さんと大東太鼓を披露する。



元気いっぱいの大東太鼓碧会の子どもたち。休日を除いて、毎夕6時半から欠かさず練習している。

青年会活動に熱中

宮古島から移住した両親のもと、7人きょうだいの6番目の長男として誕生した。サトウキビの農作業だけでなく、豆腐の製造・販売、土木作業……と働き通しの両親に代わって「姉たちに育ててもらいました」。バレーボールや野球に熱中するスポーツ大好き少年は、島には高校がないため、15歳の春に沖縄本島の浦添高校に進学。

「都会の排気ガスの臭いが嫌で、すぐに帰りたいと思いましたよ」

熊本工業大学(現・崇城大学)電気工学科を卒業後、22歳で島に戻った川満さんは、村役場に勤務しながら青年会活動に燃えた。

「島の行事はまさにチャンプルー状態で、江戸相撲もあれば沖縄角力もある。神輿もあればエイサーもある。それらを下から支えて盛り上げる青年会活動が面白くて、夢中になりました」

28歳のときに、青年会活動で知り合った5歳下のみどりさんと結婚。5人の子どもに恵まれる。どうやら川満さんがみどりさんに猛アタックしたらしい。とはいえ、とんでもないエピソードのみどりさんから聞いた。

「車でデート中に火事を知らせるサイレンが鳴ったんです。そうしたら、運転のできない私を車に残したまま飛んで行ってしまった。車がズルズル動き出して、死ぬか

と思いましたよ。あとで『私と火事とどっちが大事?』と聞いたら『火事』って言うんですよ」

川満さんの名譽のために一言添えると、当時、南大東島ではサトウキビの収穫後、畑を焼く焼畑が行われていた。そのため火事が頻発し、村職員は全員、消防団員として現場に駆けつけ、消火作業にあたる責務があったという。

「当時は日に3回も4回もサイレンが鳴ることもあったんです。今は農法も変わり、火事もほとんどなくなりしましたが、サイレン音を聞くと、今でも体が反応してしまふんですよ」と川満さん。

「だから、責任感がとっても強い人ではあるんです」と、みどりさんもナイスフォロー。

太鼓が生んだ交流

太鼓に熱中し、小学生から中学生までの島の子どもを指導するうちに、子どもたちの演奏が評判を呼んで、島外に招待される機会も多くなっていった。なかでも信州・伊那との交流は忘れられない思い出という。

「島出身の人が伊那で働いていたのがきっかけで交流が生まれ、2005年から1年おきに4回の演奏会を開いてもらいました」

地元ホームステイし、山里の自然に感激した子どもたちは、「田んぼの用水路を川だと思って水遊びしたり、本物の川に興奮し

趣味はマラソン。那覇や各地の大会に備えて1日20キロ走る。



て裸で飛び込んだり、クマが出る」と聞いて眠れなくなったり……」

たくさんのエピソードとともに、伊那人の温かな歓迎ぶりが忘れられないと川満さんは言う。

当初はあくまでも「自己満足の世界」だった太鼓の活動を始めて四半世紀。最初に教えた子どもたちも30代半ばの大人になり、その子どもが習いに来る時代になった。「いわば孫を育てているようなものです。だけど、まだまだ若くて元気いっぱいの大東太鼓の基本は、『明るく、楽しく、激しく』。でも私自身は、いつか本場の八丈太鼓のような味が出せたらなあと思っ

ているんですよ」

かつて姉妹島交流で八丈島を訪問した際に、本場の太鼓の奥深さに衝撃を受けたという川満さん。「なんというか、八丈太鼓はゆるやかで深く、豊かなんですよ」やがて年を重ね、おじいになった川満さんの太鼓から、「喜怒哀楽」のこもった音色が響いてくるだろう。そして百年後、大東太鼓は南大東島の誇る伝統文化になっているにちがいない。



熟したトウスピア（シマヤマヒハツ）の実。甘酸っぱくて少々渋い、野性的な味がする。

植えて6年になるモリンガ畑で枝の手入れをする。



かわみつけんいち
川満健一さん

●宮古島

宮古への愛が ほとばしる 情熱ファーマー

土 砂降りの雨の中、傘もささずに林の泥道をずんずん歩くおじさんの後を追いかけて、1本の木にたどり着いた。宮古島でトウスピア（シマヤマヒハツ）と呼ばれる木には、小さなブドウの房のような黒紫色の実がたわわに実っていた。

「ほらほらほらほら」うれしそうな顔のおじさんに促されて実を口にとると、甘酸っぱくて少々渋い野性的な味がした。

「おいしいですよ。だけど春に生るザウカニ（ツルグミ）やポー（クROIゲ）はもっとおいしいよ。ほらほらほらほら、あそこで小鳥がガジュマルの実を狙っているさ」

宮古人としての根こ

自ら植林したというジャングルの中をせわしく動き回っているこの人は、川満健一さん（60歳）。サンゴ礁の島、宮古島ならではのエコ農業を目指して、島の在来植物や伝統野菜を保存し紹介する

「体験農園バリバンヤ（畑番屋）」を営みつつ、高栄養で世界的に注目されているモリンガ栽培や養蜂に取り組むパワフルなファーマーだ。「私は、宮古の自然の中で育ったから、自信をもって『宮古人ですよ』と言える根っこがあるさ。だけど今の子どもたちは、島のアイデンティティーを失い始めているから、なんとかして子どもたちに根を張らすことをさせたいわけ」

在来の植物や伝統野菜は、子どもたちが島を知るきっかけになる

のではないかと、川満さんは言う。「例えば川満芋という甘藷は、私が生まれた川満集落にルーツがある百年以上前の芋です。戦後、宮古の人たちはその芋で飢えをしのいだ、いわば食の原点の芋。地元のおじいさんが細々と守ってきたものを譲り受けて育てています。子どもたちに芋を食べさせ、島の歴史を伝えていきたいんですよ」

それにしても宮古島愛の強い人だ。原点はどこですかと尋ねたら、生まれ育った川満集落の美しいマングローブ林に連れていってくれた。ウプカーという湧泉のあるここは、子どもの頃、馬を洗いに通った思い出の場所だという。

「私は小学4年生まで、祖父母に育てられたんです。だから昔の人の知恵というか、薬草なんかも全部知っている。学校の帰りに寄り道して、裸で川に入ってウナギやエビを捕って食べたり、今は保護鳥だからダメだけど、当時はサシバをペットにしていたので、エサの小魚やカエルを捕ったのもこの辺りです」

小さくて、とにかくすばしこかったという自然児は、小学5年生から平良の町の学校に転校する。「戦争で学校に行けなかったお袋は、私に希望を託して、頑張っ勉強しろ、大学まで行け、と」

自然児を返上して町の生活になじみ、平良中学、宮古工業高校と、上に進むほど成績も上がっていつ



10年ほど前から養蜂にチャレンジ。コスモスやヒマワリなど、一年中花を絶やさずに蜜を採取している。

たのは、「新しいものにチャレンジするのが好き」「探究心旺盛」と自らを評する川満さんの、アララガマ（なにくそ、負けるな）精神の賜物かもしれない。

農業一本で生きていく

福岡の九州産業大学商学部を卒業後、母のたつての願いで島に戻り、泡盛メーカーで働き始める。そのかたわら、仕事の合間をぬって、工場の周りに木を植え始めた。「道路拡張とか土地整備開発で倒された木や野草がもつたいたいと思って、拾ったりもらったりして植えているうちに、今や森になり始めているんですよ。最初は、最後の楽しみにしようという程度の気持ちで始めたけど、やがて『これは大事だ』と思うようになって、ずんずん植えていったんです」

30代半ばのこと。ザウカニの実がたくさん生ったので、島の人たちを楽しんでもらおうと祭りを計画したことがある。

「楽しいグミ狩りと言って週末イベントをしたら、いきなり1000人来た。アガイ（おやまあ）、これは軽い気持ちではでさきん。いっちゃん準備してやるべき」

そう反省したもの、ザウカニのような昔ながらの植物に対する、年長者たちの熱い思いを痛感した出来事でもあった。

1995年、40歳で一念発起。泡盛メーカーを辞めて農業一本で



自家製のモリンガ茶葉や粉末、蜂蜜をカフェで販売している。

生きていこうと「宮古流通企画」を立ち上げた。本土の農産物加工問屋と提携して、本土の端境期にシヨウガやカボチャ、ジャガイモなどを出荷するのだ。休耕地を借り受けて始めた大規模農業は、見事に成功したものの、心に満たされない思いも蓄積していく。

「とにかくいいものを作ろう、宮古島ブランドを作ろうと思って、島中の土壌を分析し、栽培方法を工夫して、努力に努力を重ねたのに、カボチャはただのカボチャ。宮古島を全面的に出したいという我々の努力は評価されんわけよ」

こだわりの体験農園

2014年8月、約20年続けた本土との提携を解消した。還暦を翌年に控えての決断だった。

「よし、これから宮古の足元を見つめるライフワークを始めよう」

手持ちの畑4カ所を整備して、秋には体験農園をオープン。在来種の野菜や薬草を中心にした農園、ミツバチの農園、モリンガ農園、それぞれの農園に特徴をもたせ、参加者は自分の興味に合わせて案

内してもらおう仕組みだ。それにしても「思い立ったが吉日」という言葉は、川満さんのためにあるのではないかと。これまでの業績に固執せず、つねに新しいことにトライするチャレンジ精神は見事だ。もっとも、モリンガや養蜂は、10年前に沖縄本島のヤンバル（北部）で出合い、趣味で手がけていたというから驚きだ。趣味で始めたものが、つねに川満さんの未来の指針になっている。

ミツバチ農園に行くと、キクイモの花が真っ盛りだった。「ほらほらほらほら。ハチがブヨンブヨン来るさ。楽しいよ」

農園や林では、たちまちハイテシヨンの子どもたちようになって、「ほらほらほらほら」を連発する川満さんであった。

「私は、宮古島を本当の意味でエコアイランドにしたいと思っています。なんです。小さくてもいいから、これだという実例を示そうと思っ在来植物やモリンガに取り組んでいる。宮古島でしかできない本当のスローライフはこれだ、というものを作っていきたいんです」

30年近く前、「木を植えた男」というアニメや絵本が話題になったことがある。荒野に黙々と木を植え続けた男のおかげで森が再生する話だ。宮古島版・木を植える男の川満さんは、黙々ではなく、饒舌に、愉快に、したたかに、今も植物を植え続けている。



泡盛の酒粕を餌に混ぜる。

山城昌泉さん

●久米島

島の将来を見据えて 農に生きる

ランス原産のレッドブロウという品種なんですけど、運動がすごく好きで、性格は軍鶏に近いです」

人気のブランド鶏

そう語るのは「久米島赤鶏牧場」の山城昌泉さん（33歳）。まるで坊さんのような名前の青年は、パツと見、ラテン系の彫りが深い顔立ちで、ホセとかカルロスといった名前が似合いそうだ。が、

「昌泉＝泉が湧き栄える。祖父がつけてくれた名前なんです」と、



うれしそうに胸を張った。

那覇の西約100キロに位置する久米島は、森林が豊かで湧水に恵まれた島だ。かつては水稻栽培が盛んで「米の島」とも呼ばれていた。そんな自然豊かな島にある鶏牧場は、敷地約1万2000坪。ならかな山の斜面に鶏舎が点在し、風が吹き抜けていく。暑さに弱いレッドブロウ種だが、海風のおかげで元気に育つという。

「常時6000羽ほどいます。一般のブロイラーは50日で出荷しま

コッコッコッ、ギャギャギャとやかましい鳴き声を上げて鶏舎を走り回る元気な鶏は、よく見れば獠猛な顔立ちで足も長く太い。このパワフルな鶏は、名だたるシェフたちが絶賛してやまない「久米島赤鶏」だ。肉質がしっかりとっているのに硬くなく、プリッとジューシーでうま味のある鶏肉は、「奇跡の鶏」「足長鶏」とも呼ばれている。

「恐竜みたいな顔でしょう？ フ

て修理が必要なのに部費でまかなえず、音の外れた楽器を子どもに使わせられないという理由で」

合唱と読書を愛する物静かな青年に成長した昌泉さんは、高校卒業後、一時は音大受験を目指すも、センター試験の申し込みを忘れて断念。沖縄本島の運送会社でアルバイトをしていた19歳の頃、父が知人の養鶏場を引き継いだ。「そこから、山城家の暗黒時代が始まるんです」

泡盛の酒粕を餌に

お盆休みに島に戻ると、両親は疲れきり、家計も行き詰まっていた。それまで手がけていた畜産、野菜や花卉栽培に加えての養鶏で、父も母も早朝から深夜まで働き詰めののに、借金は膨らむばかり。「鶏は販路がなくて売れなかったんです。でも生き物だから餌をやらなといけない。このままでは夜逃げしかないと思いました」

チャレンジャーで夢見がちな父、従順な働き者の母、そこに冷静な「安全確認」息子が加わって、地獄脱出作戦がスタートした。つてを頼んで鶏の販路を本島で探す一方で、餌代のコストカットを追求。たどり着いたのがカシジエー（泡盛の酒粕）だった。地元の酒造所「久米島の久米仙」が当時、産業廃棄物として処分していたカシジエーを、渡りに船と引き取って、穀物飼料とともに与えたところ、

「最初はものの見事に失敗しました。ドロドロのものあげると鶏が下痢してしまうんです」

やがて水分を飛ばした酒粕をもらい受けるようになり、粉碎して発酵させてから与えてみると、「肉質も味もよくなりました。カシジエーは黒麹菌のかたまりなので鶏の健康にもいいし、鶏舎の臭いを抑えて環境もよくなった。まさにいいことづくめでした」

経営が少し安定した頃、いったん島を離れて、1年ほど本土でアルバイトを経験した。折しも「ちゅらさん」放映後の沖縄ブームで、物産展に足を運ぶと、「石垣島の〇〇さんが育てたゴーヤー」が何百円もするのを目の当たりにして、「なんだ、農業には可能性があるじゃないか。これなら、久米島の山城さんが育てた赤鶏も絶対にけるハズ」

21歳の夏に帰郷して、本気で農業に取り組み始めた。

水も緑も豊かな島で

「俺が継がなかったらどうなると思ったし、農業はこれから面白い産業になる予感がしたんです」

よりおいしい鶏になるよう努力を惜しまず、東京にも販路を広げ、島の将来を見据えた農業のあり方を考えるようになった。そんな息子を父の和満さんはこう評する。「毎日が命と向き合う仕事だし、365日、心の休みがないけど、

すが、その倍の100日かけて飼育し、解体して食肉にするまでを一貫して手がけています」

今でこそ、手塩にかけてブランド鶏を育てている自負心もある昌泉さんだが、当初は関心がなく、さらさらなかったんです。だけど、親が苦闘するのを見るに見かねて手伝ったのが始まりなんですよ」

1982年、畜産や野菜栽培を手がける農家に生まれた。妹と2人兄妹の昌泉さんは、幼い頃から両親を手伝い、牛に餌をやったり、小屋を掃除したり、野菜を収穫したりするのが日課だった。

「子どもが手伝うのは絶対でした。でも手伝いさえすれば勉強しなくていいと勝手に解釈しました」

おっちょこちょいでお調子者でもあったと、当時を振り返る。

「電信柱にぶつかったり、崖から落ちたり、車に跳ねられたり……とにかく生傷の絶えない子で、都会だったら、僕は小さいうちに生涯が終わっていたと思います」

中学に進学してからは、自分は粗忽者だという自覚が芽生えて、「慌てず、ゆっくり、安全確認。それからはケガもなく、おとなしくなっていくんです」

交通標語のお手本のような少年は、クラブ活動で吹奏楽部に入部して音楽に親しむようになる。

「ところがいつの間にか合唱部になっていました。楽器が古すぎ

山城家のおふくろの味・鶏汁とゆいさんお手製のジュシー鶏ハム。



人の口に入るものを作っているという誇りをもっていると思う。だけど俺に言わしたら、優し過ぎるというか度胸がない。俺はハブを生け捕りにできるけど、昌泉は殺すだけしかできないさあ」

なんと、ガキ大将のような父だ。「だけど昌泉は、俺を反面教師にして冷静沈着になったのかも。俺は子どもには大当たりした」

そう言って喜ぶ父であった。ひと仕事終えた昌泉さんに山の湧水池に案内してもらった。

「水がグワングワン湧いているんです。鶏も牛もこの水で育てています。今は林になっているこの斜面も、昔は棚田ですごくきれいな風景だったそうです」

説明しながらも、昌泉さんの目には、はるかなる島の未来図が描かれていたようだった。

「僕は、養鶏や畜産だけでなく、『農』に生きたいんです。棚田も里山も取り戻して、ちょっと昔の久米島に戻したいんですよ」

未来への希望がコンコンと湧き出づる昌泉さんの描く「なつかしい未来の久米島」に乾杯！



闇に浮かぶサガリバナ。

葉を刈り込んで日差しを通す。花を咲かせるための手入れは欠かせない。



米盛三千弘さん

●石垣島

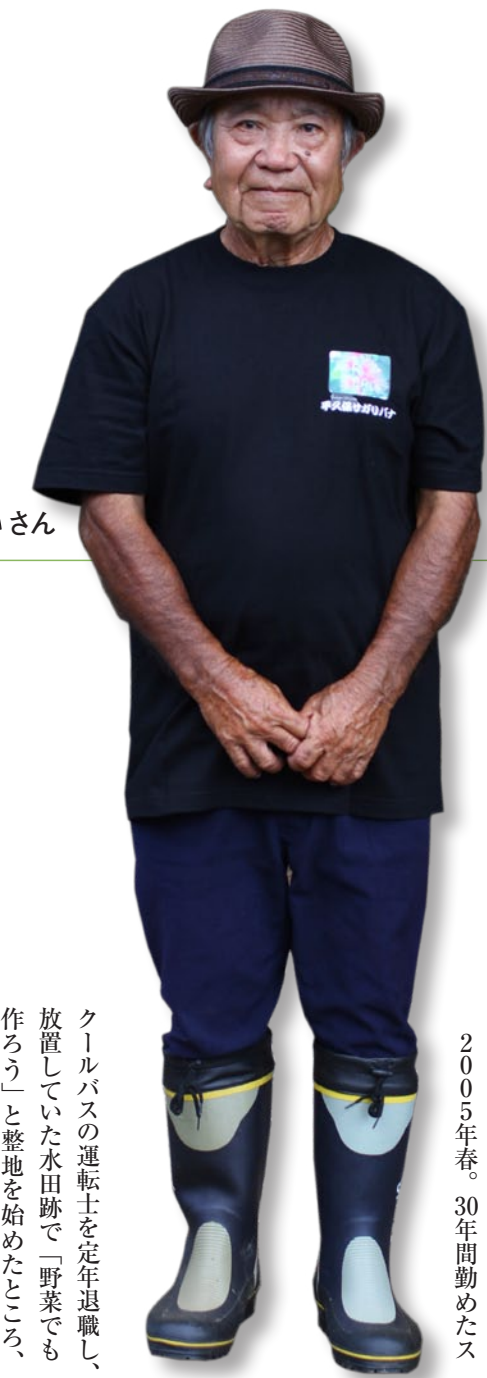
子どもたちに ふるさとを つくりたい

夜 9時。懐中電灯をかざすと、闇の中にサガリバナが浮かんだ。白、ピンク、赤……小さな花火のような花が連なり、枝垂れて咲く光景はなんとも幻想的だ。「見頃は夏場の3カ月。日暮れに咲き始めて、夜が明けると散ってしまう。フワフワしているのは長い雄しべです。甘い香りがするけど、散りぎわの夜明けの方がもっともつと匂いが強いですよ」「平久保サガリバナ保存会」会長

の米盛三千弘さん(73歳)が言う。ギョロリとした目玉、いかつい風貌で、一見近づき難い雰囲気だが、ひとたびスイッチが入ると話が止まらない、島の語り部だった。

サガリバナの森

「もう、感動に感動！」やがて人々にも知られるようになり、「お願い、自分なんかも仲間に入れて」という希望者が増えて保存会も立ち上がった。植樹も含めて、今では約1000本のサガリバナの森に育ちつつある。さすが「平成の花咲かしじさん」と呼ばれる米盛さんだけのことはあるなと思ったら、



クールバスの運転士を定年退職し、放置していた水田跡で「野菜でも作ろう」と整地を始めたところ、サガリバナの太木を発見した。「これはおかしい。1本だけじゃないはずと、生い茂るツタや雑木を払っていったら、どんどんどん出てきたわけです」

手入れて花を咲かそうと、根気よく周辺を整備していった。「当時は、不法投棄されたゴミはあるし、無茶苦茶な状態でした」手をかけて3年後、ようやく花が咲き始めたときは、



同好の士でもある愛妻の邦子さんと、最初に発見したサガリバナの下で。後方は小学生が植樹した林。



自宅の工房で自作の獅子頭を塗り直す。獅子頭やアングマ面だけでなく三線も90丁以上制作してきた。



安良岳を望むベランダでアコーディオンを演奏。190曲に及ぶレパートリーは独学でマスターした。

白保中学3年生のときのこと。1958年3月の石垣島北東沖地震での不思議な体験だ。震度5で死者も出たこの地震が起きたとき、「英語の授業中で、先生が『机の下に入れ』と叫んだけど、私の耳には『走れ、走れ』』という地鳴りのような声が入ったわけ。窓から飛び出しておそろしい速さで運動場を抜けて大木によじ登ると、校舎の瓦が落ちて、先生や生徒が転びながら右往左往している。まるで映画を見るようだった」この体験がきっかけで、いつも「ビリくそ」だった徒競走が断然早くなり、人前で堂々と話もできるようになったという。

「あのときがよ、僕の人生がコロッと大きく転換したナと思う」中学卒業後は父の農業を手伝い、パン畑や造林地で働いた。「親父から、森は人間が手をかけないとダメになると教わった」18歳で那覇に出て、念願の自動車免許を取得。島に戻って米軍払い下げの大型ジープで作業員を送り迎えしたり、トレーラーでサトウキビを運搬したりしていた。「あの頃の僕は、夢のようだった。車持ってるでしょ、カメラ持ってるでしょ。モダンボーイで、もう大変。しかもダンサー」はあ？ ダンサー!?

「本土の大学から戻った兄貴分が、ダンスホールをつくるから講師を養成したいといって、僕なんかに教えたんです。ブルースから入って、ルンバ、マンボ、ワルツ、タンゴ。楽しかったなあ」その後、大型2種免許を取得し、観光バス会社勤務を経て、伊原間中学校スクールバス運転士として石垣市の職員に採用された。30歳のときに、平久保の旧家出身の邦子さんと恋愛結婚。10歳の年齢差があったが、



サガリバナを題材にして色鉛筆で描いた絵。素朴で力強い。



鮮やかな朱色の、蒸したアミメノコギリガザミ。

吉浜崇浩さん

●伊良部島

故郷の海を守るため カニ養殖に かける

するツアーのガイドとしても活躍している。「伊良部島の入り江を知りつくした男」と言われる人は、「肩書きは養殖業者だけど、僕自身は、カニ漁師」だと思っっています。カニで生計を立てながら、カニが生存できる環境を守る。ただ捕るだけでなく、育てる漁師でないといけないと思うんですよ」

とはずいぶん違う。もって人工的な装置が並んでいると思ったら、できるだけカニが生息する環境に近づけるのが基本だという。「1日の仕事は、朝、カニや水の状態を見て決める。エサだつて買わんじゃなくて、たとえばプランクトンが増えるような環境をつくるのか……反対にエサを何日もあげないこともあるし。決まりはないですよ。『データは？』とよく聞かれるけど、『あえてとらないよ』と。なぜなら、自分の子ども育てるのにデータはとらないですよね。研究書には、産卵の目安は……うんぬんと書いてあるけど、カニは大潮のときにしか産卵しないことは経験でわかるし、データや書物ばかり頼ると、それを見ないとわからなくなると思うんです」

「ここは元は海ブドウの養殖場でした。廃屋同然だったのを、自分で手直しして始めたんです」

養殖場を借りて4年。「カニにとって心地いい環境」を求めて実験を重ねた「感性の養殖」は、予想以上の成果を上げて、「思っただけ以上にカニが頑張ってくれている」という。そんな吉浜さんの養殖は、徹底した観察から生まれた。

感性の養殖

スラリとした長身、ギョロリとした目玉がなんとも印象的だ。「皆から歌舞伎役者の海老蔵に似ていると言われて、『いやいや、僕はカニを飼っているから蟹蔵だ』と、社名を『蟹蔵』にしたとか。それにしても想像していた養殖

少年時代は昆虫博士

伊良部島・国仲で4人きょうだいの末っ子として誕生。消防士の父は留守がちで、7歳上の兄と一緒に遊んでくれず、必然的にひとり遊びが好きな少年になった。「林で昆虫を見つけては家で飼い、浜で見つけた小魚やカニ、熱帯魚



養殖場でカニの状態をチェック。



入り江のマングローブ林は生き物のパラダイス。エサを入れたカゴ網を仕掛けて天然のカニを捕獲する。

や小鳥も飼育していました」『ファール昆虫記』をすり切れるまで愛読するなど、小学生のときは「昆虫博士」というあだ名がつくほどの生き物好きだった。「とくにカブトムシの飼育が得意で、マニユアルどおりでは面白くないので、地元の木やエサで育つかどうか試するのが大好きでした」

「それに、子育ての環境にもびったりだと思っただけです。運送会社で働いていたときは、朝、子どもが寝ているときに出勤して、寝てから帰るような生活だったから」



趣味はアームレスリング。怪力のガザミも敵わないほどの握力。

「小魚がエサを食べたら、明日はもっと大きくなるナとか想像しながら眺めるんです。小さな水槽にはロマンが入っているんですよ」

ベランダで実験飼育

24歳で帰郷。伊良部島と短い橋で結ばれた下地島の下地島空港で働きながら、実家2階のベランダでカニの飼育を始めた。当時、下地島空港はパイロット訓練用にさかんに使われていたので、

金をつぎ込んで養殖場を確保し、本格的に養殖を始めた。「自然のままだと、稚ガニは成熟する前に捕食されることが多いけど、大きく育てて何割かを再び放流してやれば、環境も守れるし、カニ漁も回復すると思うんです」

「小魚がエサを食べたら、明日はもっと大きくなるナとか想像しながら眺めるんです。小さな水槽にはロマンが入っているんですよ」

「空港整備の補助で機器の点検をしたり、宿泊施設の電気やガスの設置をしたり。そのために必要な資格を取り、技術を学んだことが、いま養殖場で役に立っています」

少年のように生き生きしている。「僕はカニの養殖で一獲千金……といったことは、毛頭考えていないんです。少しはもうけないと家族を守れないけれど、カニの養殖は、あくまでも入り江を守るための一環だと思っています」

希望どおり今では6人の子どもの父になっている。少子化に悩むこの国では表彰状ものの一家だ。「結婚後、島に里帰りしてガザミを食べたとき、思わず『世界一うまい！』と叫んだんです」

「お金がないから、プラスチックの衣装ケースを何十箱も購入して飼ったら、ケースが太陽の光で1年足らずでパリパリに割れたり、タンクにつないだホースが外れてベランダが洪水になったり……」

2012年、那覇転勤の辞令が出たこともあり35歳で退社。退職



妻の朝子さんと6人の子供と。長女にいの、長男承太郎、次男耀矢、三男力氣、次女めいみ、三女こいか。



小学生の環境教育用に作ったスーパーマン・カニゾウの紙芝居。吉浜さんが描き、家族で色を塗った。

自分でも捕ってみようと入り江を探し、子どもの頃より環境が悪化していることに心を痛めた。3日目によりやく1匹見つけたときにカニと目が合い、冒頭の思いにとらわれて帰郷を決意した。

2015年に宮古島と橋で結ばれた伊良部島は、新しい観光スポットとして注目を浴びている。「環境がどうなるか心配ですけど、僕の信条は『昔はもっときれいだっただけ』ってこと。次の世代に、昔よりきれいな入り江とカニを手渡したいと思っています」



蒸した田芋。皮がひび割れているほうがおいしいという。

小雨の中、田んぼの畦の草取り。



みやぎ まさる 宮城 優さん

●沖縄本島

自然農法で伝統の田芋を育てる

沖 縄の芋といえば紅芋べんいもが有名だが、「田芋たん芋（ターンム）」と呼ばれるサトイモ科の芋は、沖縄芋界の王者の風格がある。琉球王国時代から今に至るまで、「子孫繁栄」を象徴する芋として伝統行事や祝事の料理に欠かせない。最近ハスイーツの素材になるほど、ウチナンチュに愛されてきた。沖縄本島・宜野湾市大山。国道58号線から海側に向かうと、市街

地にぽっかりと奇跡のような田園風景が広がった。別名・水芋とも呼ばれる田芋の田んぼだ。「大山は昔から湧き水がすごいからね。今も大きなカー（井泉せいせん）が8カ所もある。お金のかからないきれいな水がどんどん湧くなんて、田芋の栽培にピッタリでしょう」そう語るのは「サンキューファーム」の宮城優さん（52歳）。田芋を無肥料・無農薬で育てる「自然栽培」に挑戦している人だと聞いて、生真面目で野暮ふろうぼうったい風貌を

想像していたら、違った。れっきとしたおじさん世代なのに、ジーンズ姿が似合うアニキ的雰囲気醸し出している人だった。

バブル時代は東京で

「もともと僕は、農業をやる気はまるでなかったんですよ。都会に憧れて、田んぼなんかいらないうと思っていた時期もあったし」そんなシティー派志向の人が、なぜ自然栽培ファーマーに？「なんの知識も経験もない」ド素



自然栽培した皮付き田芋を皮ごと素揚げしたスナックは大人気。

腐る病気。農薬や化学肥料の使い過ぎで地力が落ちたんだと思うけど、このせいで高齢農家の耕作放棄地が一気に増えてしまった」このままでは大山の田んぼが消えてしまう。危機感をつのらせていたときに偶然のように読んだのが、青森でリングゴの自然栽培に成功した木村秋則氏の著書だった。2011年1月、沖縄での講演会で「沖縄でしかできない食材を、私の栽培方法でやってみませんか？」と呼びかけた木村氏の言葉に共鳴した宮城さん。迷うことなく自然栽培へと舵かじを切った。

共生する田んぼ

思い立ったら即行動のこの人、見かけはソフトだが、案外ハードなガージュー（頑固者）かも。「やらないで後悔するより、やって後悔したほうがいいじゃない」自然栽培に切り替えることで、田芋の生育はゆっくりになった。しっかりと根が張るまでは、何度も雑草を取らないと芋が負ける。「だけど田んぼには、何も足さず、何も引かない。入れるのは僕の愛

情だけ」と宮城さん。毎朝、田んぼを見回るときも、田芋に「頑張って」と声をかけ、歌を歌って励ましているという。とはいえ、最近の異常気象には泣かされることもある。「僕の場合、自然が味方であり敵。最近、なるべく旧暦に合わせて農作業するようにしている。まだまだ手探りだけど、安心して食べ、血になり肉になり心になるものを作っている満足感はあるよ」

植え付けや収穫などのイベントや観察会を催して田芋の魅力をアピールしてきた宮城さんいわく、「子どもたちが泥んこになって遊びまわった田んぼは、不思議に田芋の成長がいんだよね」

「じゃあ、年寄りが踏んだ田は？」「面白い。やったことないから、今度やってみよう。どうせやるなら、楽しくやらないとね」

最近、地力が回復してきたのか、田んぼにいろんな生き物が戻りつつある。生き物が戻ったら、人間まで面白い人となつがるようになったと笑う。自然栽培農家、3・11の後に本土から移住した家族、自然食品店や食堂の経営者……。

宮城さんの田んぼは、いろんな生き物がいて、いろんな人間が集う「共生社会」だ。まわりはコンクリートの街だけど、緑の田んぼの畦道で思いっきり深呼吸して、サンキューファームの合言葉「ありがターンム」と叫びたくなった。

写真提供・大山田芋ファンクラブ



ターンムの日(2月6日)、植え付け、収穫など、節目ごとに開催する田芋イベントの主役は子どもたち。



週末、移動販売車で各地のイベントなどで田芋の素揚げを販売。生産者自ら田芋の魅力を発信している。



水が枯れたことがないアラナキガー。今も大切に使われるこの湧水は戦前、那覇の水源だったという。



ミルミル本舗の看板商品、ジェラートは、規格外の島産フルーツも使われている。

伊盛米俊さん

●石垣島

でっかい夢を実現した南の島の酪農家

「よく言われるさ、僕の場合、体型はストレス性の肥満、昔は体重55キロだったんだけどねえ」と、遠くを見る目になった。

数々の賞を受賞

伊盛牧場は、亜熱帯では難しいといわれる酪農に挑戦し、高品質の生乳を生産している。ジェラートやジャムなどの加工品も製造し、自前の店舗で売るなど、生産・加工・販売を一貫して行う、農業の6次産業化を成功させた。そ



15歳のときに描いた夢はカウボーイ。がむしゃらに夢を追いつけた少年は、40年後、酪農家として日本一の賞に輝いた。

石垣島の市街から車で15分ほど。地元の人が「おっぱい山」と呼ぶ小高い丘の中腹にある伊盛牧場を訪ねると、代表の伊盛米俊さん（55歳）が迎えてくれた。力士のような体格、大きな福耳、誰かに似ている……そうだ。八重山の祭祀にしばしば登場するミルクさま（弥勒神）だ、と思ったら、

の実績が評価され、昨年、全国農業コンクールでグランプリと農林水産大臣賞をダブル受賞。さらには農林水産祭で天皇杯も授与された。沖縄初の快挙だった。

「グランプリで伊盛牧場の名前が読み上げられた瞬間、今までの苦労がよみがえって涙が止まらなかった。『諦めたら終わりだ』と自分に言い聞かせながら、細い綱にぶら下がるような人生だったから」父は与那国島からの移住者だが、成功してカツオやマグロ船を有し、

加工場も経営する船主だった。6人きょうだいの次男として生まれた伊盛さんは、小学生の頃から工場を手伝わされて「漁師にはなりたくない」と漠然と思ったという。中学3年生のときに、仲良しの農家の息子が連れてきた農耕馬に乗っておっぱい山に登った。「藪をかきわけて登った頂上で、眼下に広がる壮大な海の美しさに感激して、こんな光景を見ながら馬に乗る仕事がしたい。それには牧場がいいと思ったんです」

高校に行かずに農業をやる宣言すると、両親や教師は猛反対。「皆、入学しさえすれば学校が楽しくなるハズとふんで、合格したらやめてもいいからと説得されて」

牛1頭からのスタート

当初はアルバイトをしながら肉用牛の生産者を目指した伊盛さん。あるとき、飼い主も獣医も見放した瀕死の子牛をタダでもらった。「衰弱して首も曲がったような牛だったけど、哺乳瓶でミルクやっで育てたら元気になりました」その後、牛を1頭購入し、借り



ミルミル本舗からの眺め。崎枝半島を望み、夕日も美しい眺望は、畜産農家を目指すきっかけになった。



老後の楽しみにしよう牧場周辺を少しずつ農地に整備中。グアバや島バナナなどの果樹を植えている。



ミルミル本舗店内で、商品加工担当の妻・京子さん（左）、店舗担当の嫁・洋子さん、孫・ナツメくと。

ものの牛小屋で畜産をスタートさせた。だが、道端の草を鎌で刈ってエサにするような仕事ぶりに、「周囲からママゴトだと笑われたけど、うれしくて夜中まで牛の姿をずっと見ていたなあ」19歳で、2歳年上の美容師で船主の娘の京子さんと恋愛結婚。「牛小屋に連れていったら、鼻をつまんで息をしないから、こりゃダメだと思ったら、僕の魅力が勝ったのか結婚してくれました」京子さんに聞くと、実は伊盛さんの「手」に強く惹かれたという。「ものすごくゴツい手をしていました。一生懸命働く人だし、この手なら大丈夫じゃないかな、と」20歳で長男が生まれ、2年後には長女も誕生した。超のつく貧乏暮らしだったが、親に泣きついたことはないときっぱり。「忍耐強いって？ 家内の忍耐はすごいよ。だけど子どもに貧乏させるのはつらいよね。せがまれても、100円がなくて、ぜんざいが食べさせられないんだから」数頭の牛を飼うのにも悪戦苦闘していた26歳の頃、石垣市から未開発だった土地を牧場として整備しないかという話が舞い込んだ。地元の農家が「ペンペン草も生えない」と嫌う痩せた傾斜地だったが、土地のない伊盛さんには渡りに舟。借金して購入し、朝から晩までトラクターで土地を整え、「良い土は利益を生み出す」をモット



天皇杯の表彰状と銀杯（レプリカ。実物は持ち回りのため返却）。

ーにして牛糞をまき続けた。そのかいあって牧草も育ち、牛も40頭ほどに増えた28歳の頃、肉用牛から乳用牛へ転換をはかった。「子牛がヤギより安いと言われた時代で、買い手が値段を決めるのも気に食わなかったし、へそ曲がりだから他人と同じことをしたくなかった。それに、乳牛は毎日収入があるのも魅力だったからね」北海道から陸路とフェリーでホルスタインを取り寄せたとき、「暑さと病気でバタバタ倒れて30頭のうち25頭が死んだ。生きる気力もなくすほど落ち込んだけど、このとき、亜熱帯に合う酪農をしないとダメだと決意しました」

最新設備と技術を導入

2005年、43歳のときに暑さ対策を万全にしたコンピュター制御の最新式牛舎が完成した。台風に備えて自家発電装置も完備した。ここから伊盛さんの、これまでの苦労への怒涛の反撃が始まる。後継牛となる雌を産ませる最先端技術の導入や、肥沃な土地で育った牧草のおかげで、いまや暑さ

に強く乳量や乳質のいい純石垣島産の牛が育ちつつある。「ただし経費は上がる一方なのに乳価は30年間据え置き。苦肉の策で始めたのがジェラートです」2010年、少年の頃の憧れの地だったおっぱい山の丘に「ミルミル本舗」を開店した。農家から買い取った規格外のマンゴーやパインなども、ジェラートにしたら大人気になった。「ミルクのミルと景色を見るで、ミルミル。小さな子どもにも覚えやすい名前でしょう？」自慢げに笑う伊盛さんの案内で「ミルミル本舗」に向かった。青い海と空。思わず「ワーツ」と歓声を上げたくなるほどの絶景が目の前に広がった。店内では長男嫁で東京出身の洋子さんが生き生きと働いていた。新石垣空港内のミルミル本舗空港店も掛け持ちしていると聞いて、洋子さんに、「お舅さんは怖い？」と尋ねると、「とっても優しいです。子育てや介護で大変なスタッフの状況も考慮してくれるし、お義父さんというよりも理想の上司という感じ」聞けば、洋子さんの両親も東京から引越してきてマイペースで加工場を手伝っているという。伊盛牧場は、家族や親戚を核にしてどっしり地を足つけて経営するイタリアのファミリー企業のようなのだ。その中心にいるのは、もちろんミルクさまに似た人だ。



移民した人の子孫、ニッケイの魅力をさまざまな形で紹介してきた。

「オキナワ・ラティーナ」の公演に向けて子どもたちも猛練習。



仲宗根ゆうこさん

●沖縄本島

ニッケイの パワーを 沖縄から発信する

「オラ！ コモエスタス？（やあ、みんな元気？）」
仲宗根さんが聞くと、子どもたちが一斉に大きな声で応じた。
「マイ・ビエーン！（元気だよ）」
9月某日、沖縄市のミュージックタウン音市場では、「オキナワ・ラティーナ」のイベントに参加する子どもたちが、ダンスや打楽器の練習をしていた。
「日系ペルー人の子が多いけど、カナダやインドネシアのハーフの

子もいます。ノーボーダーで沖縄とラテンをつなぐイベントだから、国籍問わず、やる気のある子をオーディションしました」
「オキナワ・ラティーナ」代表の仲宗根ゆうこさん（53歳）が言う。
「オキナワ・ラティーナ」とは、沖縄とラテンを音楽で結ぶプロジェクト。2015年、ペルー出身の日系3世で、バンド「ディアマントス」のアルベルト城間さんの発案で始まった。沖縄で毎年イベ

「いえ、ウチナンチュです。でも、もし戦争がなかったら、ペルー生まれの日系3世だったかもしれない。母方の祖父がペルー移民1世で、祖父母がペルーに渡ったとき、幼かった母は沖縄の親戚に預けられたまま、戦争で両親と生き別れてしまったんです」
第二次世界大戦で連合国側についたペルーは日本と国交を断絶。やがて終戦を迎えたが、親子が再会を果たしたときは、別離から30年以上の月日がたっていた。

「私が6歳の頃だったと思う。那覇空港で母と再会した祖父母が、突然カチャーシーを踊り出したのを、今も鮮明に覚えています」

仲宗根さんは北中城村で生まれ、コザ（沖縄市）の中心街で育った。両親ともに教育者で、父は「沖縄こどもの国」園長も務めた。

兄と弟に挟まれた長女で、男の子とばかり遊んでいるようなお転婆な女の子だった。そして中学からは大阪信愛女学院へ。

中学から親元を離れるとはびっくりだが、復帰直後の当時、教育熱心な家では、子弟を本土に送り出す風潮があったようだ。

「いきなり大阪弁の世界でメゲましたけど、沖縄なまりの大阪弁を面白がられてすぐに慣れました」
中学・高校と美術部で陶芸や絵画に親しみ、東京の文化服装学院へ。卒業後、会社勤務を経て、テレビ番組制作の仕事に就いた。ク

「僕は、ナニ人かと問われたら、アルゼンチン人でも日本人でもなく、ニッケイだと答える」と言うほど、ニッケイに対する誇りとアイデンティティーをもっている。ともすると『移民』『デカセギ』とくくられてマイナスイメージで語られがちな「日系」だけど、今や進化したかっこいい「ニッケイ」は、世界を動かすはず」

ニッケイに対する熱い思いがほとばしる仲宗根さんを、アルベルト城間さんはこう評する。
「とにかく人を育てようという気持ちが強くて、僕にとって素晴らしい仲間であり、頼れるお姉さん。この国に収まりきらないウチナンチュであり、日本人であり、ペルー人であり、地球人」

仲宗根さんの家には、年中さまざまな国の人が出入りし、さまざまな言語が飛び交っている。
「我が家は一年中、世界のニッケイ大会！『ニッケイ』という新しい文化に出会ったから、ニッケイをつなぎ、魅力を伝えていくことが、私の使命だと思っています」



ペルーを代表する料理「セビーチェ」は新鮮な魚のマリネ。いつか専門店をつくりたいと夢想している。



リマで食堂を営んでいた祖父母。中央は曾祖父母。後列は、母が会ったことがなかった弟や妹たち。



周囲からジャングルと呼ばれるほど緑の植物が生い茂る庭は父・喜栄さんが丹精した。母・鈴子さんと。

ペルーでの4年間

陶芸や琉球料理を習い、園芸の学校へ行き、それまで意識の向かなかった足元の沖縄を学んだ。
そして2010年春、「母のルーツの国」ペルーへと旅立った。
3カ月ほどのつもりで首都・リマの親戚の家に転がりこんだはずが、滞在は4年間に及んだ。
「ペルー料理とその食文化が、あまりにも魅力的だったんです」
ガチマヤー（食いしん坊）を自認する仲宗根さん。ペルー人の料理への過剰な愛と誇りに触れて、「すっかり魅了されました。料理の話となると、知らない人同士でも何時間でも盛り上がるんです」
折しも、ガストン・アクリオというカリスマシェフの活躍で、ペルーの国は活気づいていた。
「ガストンは、美食家を満足させただけでなく、貧しい子も学べる料理学校をつくり、生産者の地位も向上させた。料理が人と人をつ

なぎ、人種を超えて国の政治をも動かす力になっていったんです」
うねりに遭遇した元テレビウーマンの感覚がビビッと働いて、ペルー料理の魅力を日本の雑誌やメディアへ発信する日々が続いた。
「ペルー料理は、アマゾン、アンデス、砂漠など、あらゆる気候の食材と、インディオ、白人、黒人、中国人、日本人……さまざまな民族のミックスの味。若い日系人シエフの、ペルーと日本を融合したニッケイ料理が美食家を虜にし始めていました」
2014年、両親が相次いで入院したのを機に帰国した。そして翌年、「オキナワ・ラティーナ」の活動をスタートした。
活躍するニッケイ
世界中に約42万人の沖縄系人がいる移民県・沖縄は、5年ごとに大イベント「世界のウチナンチュ大会」を開催している。昨秋の第6回大会で「オキナワ・ラティーナ」は、キューバ移民をテーマにした音楽劇を上演し、カナダで活躍するバンド「金城ブラザース」や、アルゼンチン在住の歌手で医師の日系4世、グロス外間を招聘して音楽イベントを開催した。
「かつて移民した人の子孫が、今や3世4世の時代。日本語はできなくても、心に日本や沖縄を思う気持ちをもって活躍しています。縁あって私がプロデュースしてい

小学生の頃から陶芸に魅せられてきた。自作の植物のための器。

